

実践的コミュニケーション能力の基礎を養う 小中一貫した英語教育の在り方を求めて

— 中学校1年英語科の実践と指導計画の検討を通して —

現在、京都市では小学校英語活動が全ての小学校の総合的な学習の時間に取り組みられている。中学校では、小学校英語活動の取組を生かし、小中一貫を見据えた指導が必要であると考え。子どもたちの小学校英語活動で養われた「コミュニケーションに対する意欲」を中学校での英語学習につなげることが望まれている。

そこで、本研究では、小学校と接続する中学校第1学年の指導計画に着目し、検討を進めた。小学校英語活動の成果を踏まえ、中学校の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指すため、指導計画に3つの視点を取り入れた。ここでは、指導計画の3つの視点を意識した実践授業の成果と課題を報告する。

目 次

はじめに	1	第3節 視点③ 自己表現活動を大切にする	
第1章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成		(1) 自己表現活動とは	14
第1節 中学校英語学習の現状と課題		(2) 年4回の自己紹介のスピーチ	14
(1) 実践的コミュニケーション能力とは	1	第3章 実践授業での様子	
(2) 中学生が英語学習に求めるもの	2	第1節 実践授業の成果と課題	
(3) 本市中学生の英語の学力における課題	7	(1) Unit 1 Lesson 3	19
第2節 中学校英語学習の指導計画の検討		(2) Unit 2 Lesson 4 と Word&Word 3	21
(1) 小学校英語の必修化をめぐって	8	(3) Unit 2 Lesson 5 と Useful Expressions 1	22
(2) 小学校英語活動での子どもたちの変化	9	第2節 スピーチにおける成果	
(3) 小学校英語活動からつなぐ3つの視点	10	(1) 第1回スピーチの様子	23
第2章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成で大切にしたい3つの視点		(2) 第2回スピーチの様子	23
第1節 視点① 小学校英語活動で身につけたことを生かす		(3) 第3回スピーチの様子	26
(1) 小学校での英語活動	11	(4) 生徒の変容	29
(2) 指導計画の中の視点①	12	第4章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成をめざして	
第2節 視点② つまづきに対する支援を事前に準備する		第1節 小学校英語活動と中学校英語学習をつなぐもの	
(1) 文字の導入時におけるつまづきについて	13	(1) 「小学校英語活動で身につけたことを生かす」ことで見えてきたもの	30
(2) 語順についてのつまづきについて	14	(2) 「つまづきに対する支援を事前に準備する」ことで見えてきたもの	31
(3) 単語の使い方に関するつまづきについて	14	(3) 「自己表現活動を大切にする」ことで見えてきたもの	31
第3節 視点③ 自己表現活動を大切にする		おわりに	32

<研究担当> 村山 紀子 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立嵯峨中学校

<研究協力員> 見原 潔 (京都市立嵯峨中学校教諭)

はじめに

平成18年3月に、中央教育審議会の外国語専門部会は、小学校で英語の必修化を求める報告をした。アジア各国で小学校段階の必修化が相次ぐ中、小学校段階における英語教育を充実する必要があるとして、高学年（5～6年）で平均週1回（年間35単位時間）の英語教育を行うよう提言した。

本市では、平成9年度より「きょうと英語フロンティアキッズ事業」が開始され、平成11年からは、全小学校で英語活動に取り組んでいる。平成15、16年度には本研究課において、多田泉⁽¹⁾が小中連携を意識して、タスクを中心とした中学校での学習プログラムの開発を行った。さらに、小中の接続を滑らかなものとするため、昨年度からは概ね2中学校区毎に1名の外国語指導助手（ALT）が配置され、校区内の小学校へ英語活動の巡回指導を行っている。こうした状況を踏まえ中学校では、小学校英語活動の取組を生かし、小中一貫を見据えた指導が必要であると考えます。

そこで、本研究では、平成14年度に京都市教育委員会が編集した「小学校英語活動の指導計画と活動事例集（試案）」をもとに、小学校と接続する中学校第1学年の指導計画に着目し、その検討を進めることにした。小学校英語活動で養われた「コミュニケーションに対する意欲」を大切にしながら、英語学習に対する生徒の願いを知り、生徒が英語学習の成就感や価値ある喜びを得られるような学習活動を用意することが中学校英語学習の課題である。

生徒が英語学習で望むことを知るためにアンケート調査を行った。そこでは、生徒の願いとともに学習につまずいて困っている姿がみえた。このことをもとに、本市学力定着調査から明らかになった課題と併せて、小学校での英語活動を生かした中学校の英語学習にするために、指導計画の検討を進めた。

この研究を通して、小学校英語活動で身についた、人と言葉でつながる喜びやコミュニケーションに対する意欲を中学校での英語学習につなげ、小学校英語活動で習得した力を中学校英語学習で伸ばしていきたいと考える。

第1章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成

第1節 中学校英語学習の現状と課題

（1）実践的コミュニケーション能力とは

今日、中学校英語教育では、英語によるコミュニケーション能力の育成が求められているが、実践的コミュニケーションとはどのようなことを言うのであろうか。

平成10年の学習指導要領⁽²⁾での外国語科の目標は、次の3つから成り立っている。

- ①外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

この③の「実践的コミュニケーション能力」については、ここでは、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである」⁽³⁾と説明している。

次に、実践的コミュニケーション能力とはどのようなものか、中学校学習指導要領でみる。英語での具体的な目標⁽⁴⁾を表1-1に記す。

表1-1 中学校学習指導要領（平成10年12月）

第2章 第2節 1 目標

- （1）英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- （2）英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- （3）英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- （4）英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

この目標を達成するには、3年間を通して各学校が生徒の学習の実態に応じて、学年ごとの目標を設定し、その基礎的な能力を柔軟に指導すればよいとしている。

これらのことから、実践的コミュニケーション能力とは、英語を使って日常的な会話や簡単な情

報の交換，自分の意思を相手に伝えたり，相手の意思を聞き取ったり，また，その相手に対して自分なりに考えたことを表現できたりするようなコミュニケーション能力のことであると言える。

次に，中学校段階で，どの程度の英語力が求められるのかについて考える。「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(5)が平成15年3月に出された。国民全体に求められる英語力の目標を表1-2にまとめる。

表1-2 日本人に求められる英語力の卒業段階での目標

卒業段階	目標
中学校	挨拶や対応，身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる (卒業者の平均が実用英語技能検定【英検】3級程度)
高等学校	日常的な話題について通常のコミュニケーションができる (卒業者の平均が【英検】準2級～2級程度)

本市では，平成17年度に「京(みやこ)・英語スタンダード」(6)という4項目からなる中学校卒業段階での目標を定めた。その中では，「未来を担う京都市の子どもたちに，国際社会の中で世界文化自由都市，また，国際文化観光都市である京都市の市民としての自覚をもち，主体的に生きていく上で必要な資質や能力の基礎を身に付けさせるため，小中連携英語教育の中学校卒業段階での目標として，次の4項目からなる“京(みやこ)・スタンダード”を定める」(7)としている。その4項目を記す。

- (1) 英語でコミュニケーションをしようとする意欲がある。
- (2) 英語学習を通じて，多様なものの見方や考え方を理解し，国際協調の精神の素地が育っている。
- (3) 外国人に英語で話しかけ，必要な情報を教えることができる。
- (4) 英語をはじめとする様々な言語や文化に興味を持ち，自ら進んで外国語やそれに関連する学習を継続しようとする態度が育っている。

その目標の(3)は，先に述べた「実践的コミュニケーション能力」であり，「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」の中学校卒業レベルといえる。

国全体として，また，本市としても，実践的コ

ミュニケーション能力の基礎の育成が求められている。学校教育のなかで，このような基礎的で，実践的なコミュニケーション能力を育てるには，各学校段階を通して一貫性のある指導を行う必要がある。小学校英語活動のよさを中学校英語学習に取り入れ，さらに発展させていくことが求められているのである。

(2) 中学生が英語学習に求めるもの

中学生は，中学校の英語学習に何を求めているのだろうか。

現在本市では，すべての小学校で英語活動が総合的な学習の時間に取り組みされており，聞く・話すという2技能を中心にした活動が行われている。英語活動で楽しく学んできた子どもたちが，どのような英語学習を望んでいるのか，研究協力校の1年生，2年生において3種類のアンケート調査を行った。

ア「小学校のとき，中学校の英語の学習をしてどんなことができるようになりたいと思いましたか」
 対象：1年生 214人 2年生 250人
 時期：5月第3週 複数回答可

小学校のとき，どのような英語学習を望んでいたかの質問に対する答えの結果を，学年ごとに図1-1と次頁図1-2にまとめる。

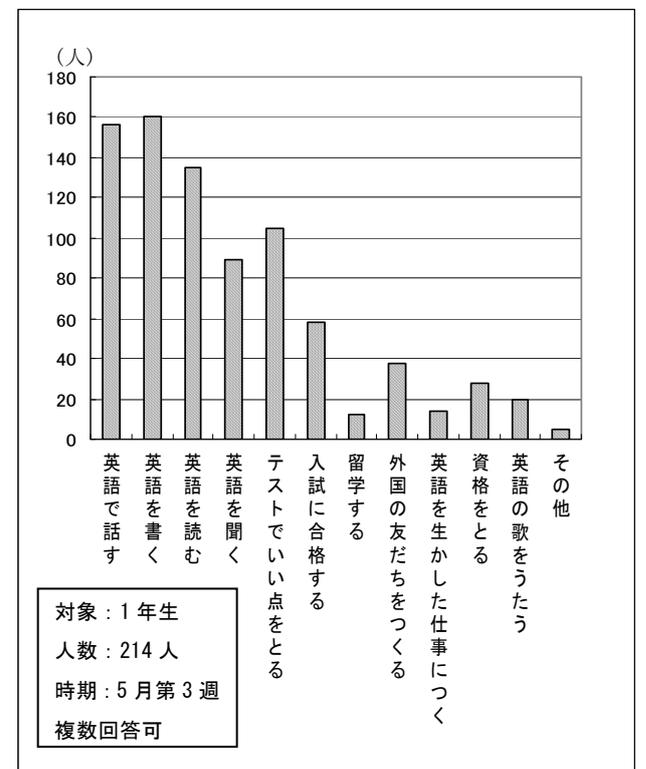


図1-1 「小学校のとき，中学校の英語の勉強をしてどんなことができるようになりたいと思いましたか」

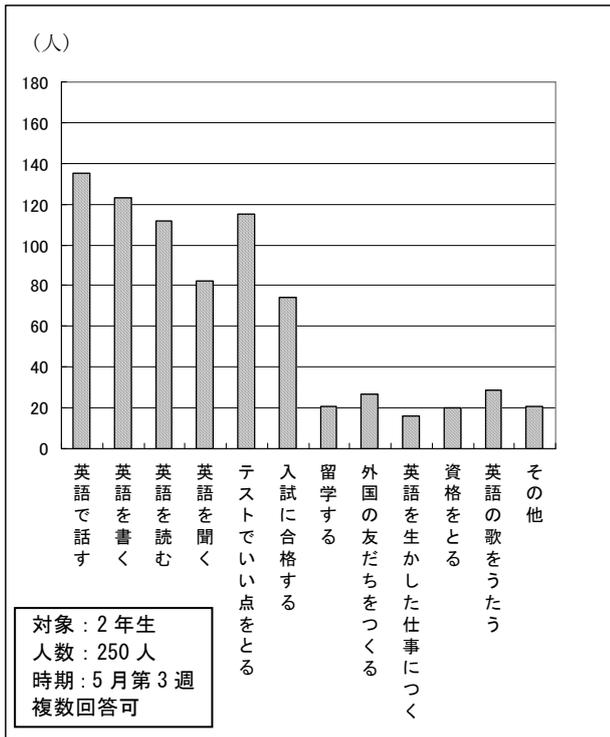


図1-2 「小学校のとき、中学校の英語の勉強をしてどんなことができるようになりたいと思いましたか」

1年生では、全員が総合的な学習の時間に小学校英語活動を経験してきている。1年生全体214人中74%にあたる160人の生徒が中学校英語学習で英語を「書けるようになりたい」と思っていた。また、全体の72%である156人の生徒が「話せるようになりたい」と思っていたことがわかる。2年生では、英語で「話せるようになりたい」と思っていた生徒が全体の250人中54%にあたる135人が一番多い。次に英語を「書けるようになりたい」と思っていた生徒が全体の49%にあたる123人おり、「テストでいい点をとりたい」と思っていた生

徒は全体の46%の115人であった。「入試に合格したい」を選んでいった生徒は全体の29%で74人いた。

2年生では、1年以上も前の小学校のときに思っていたことを聞かれているため、現在の思いも含まれている可能性があり、慎重に分析する必要がある。

このように、生徒たちは中学校での英語学習に様々な期待をもって入学してくる。小学校ではじめて習った英語を、聞いたり、話したりするだけではなく、今度は、読んだり、書いたりできるようになりたいと思って入学してくる生徒が多いことがうかがえる。

イ 「中学校の英語の授業で楽しいことは何ですか」
 対象：1年生 214人 2年生 250人
 時期：5月第3週 1年生・2年生
 7月第3週 1年生 複数回答可

この質問では、記述式で回答するように求めた。そして、一人一人の生徒の回答内容を分析して、4つの大きなカテゴリーにわけた。次頁図1-3は記述式の回答の結果をカテゴリーにわけたものである。表1-3はそのうちわけについて、回答の度数と比率を表したものである。

1年生の5月第3週では、英語の授業で楽しいことは「話す」ことで77人の生徒が楽しいと答えている。次に多いのは「書く」で28人と続いている。「英語学習にチャレンジする喜び」のカテゴリーでまとめたものは、英語ができるようになるのが楽しいという生徒の喜びの内容である。生徒の声を次頁表1-4に紹介する。テストが楽しいと答えている2人と併せて54人、全体の25%の生徒が中学校の英語学習のなかで、学習してわかった喜びを感じていることがわかる。

表1-3 「中学校の英語の授業で楽しいことは何ですか」 複数回答可 人（ ）内はパーセント

		1年生5月第3週 214人(%)	1年生7月第3週 213人(%)	2年生5月第3週 250人(%)		
言語活動	コミュニケーション Output	発表	8(4%)	3(1%)	1(0.4%)	
		話す	35(16%)	13(6%)	18(7%)	
		友達と話す	26(12%)	13(6%)	7(3%)	
		先生と話す	8(4%)	7(3%)	6(2%)	
		書く	28(13%)	21(10%)	8(3%)	
		Input	聞く	8(4%)	2(0.9%)	7(3%)
			読む	16(7%)	18(8%)	9(4%)
			ゲーム	23(11%)	97(46%)	84(34%)
			チャレンジ	52(24%)	51(24%)	50(20%)
		英語学習にチャレンジする喜び	テスト	2(1%)	3(1%)	7(3%)
教科担任との出会い	29(14%)		31(15%)	21(8%)		
その他	特になし	25(12%)	21(10%)	59(24%)		

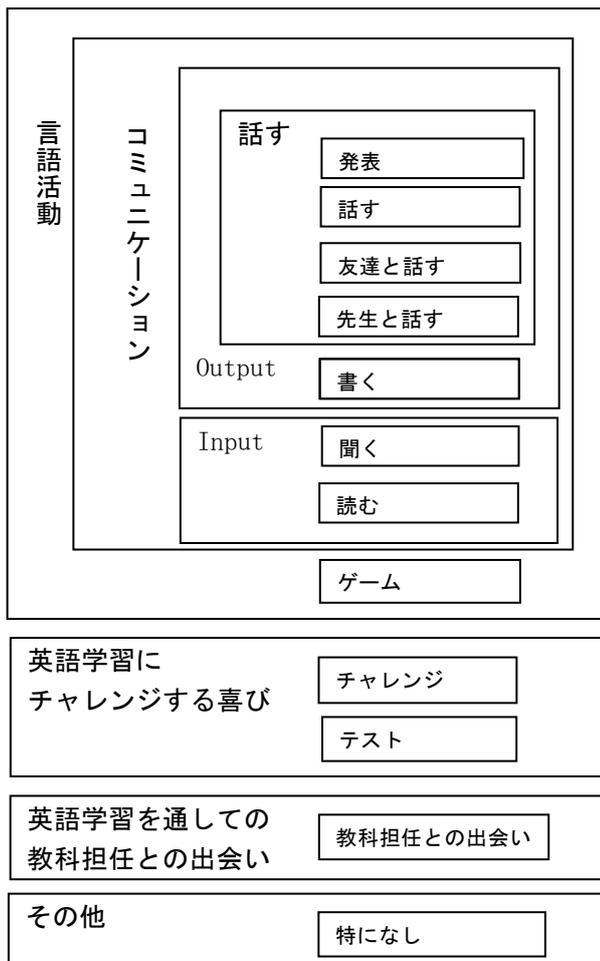


図1-3 「中学校の英語の授業で楽しいことは何ですか」
複数回答をカテゴリーにわけたもの
対象：1年生 時期：5月第3週, 7月第3週
2年生 時期：5月第3週
複数回答可

表1-4 「英語学習にチャレンジする喜び」に関する
生徒の記述 1年生 5月第3週

- ・1回, 1回の授業で英語を話せたり, 書けたりできると思うことが楽しい。
- ・小学校よりも中学校のほうが難しい単語があるから, それをわかっていくのが楽しいです。
- ・どんどん英語が覚えられて, 英語が話せるようになるのが楽しい。
- ・教科書の英語を覚えたり, 意味を考えたり読んだり書いたりするのが楽しい。
- ・しっかりと発音を聞いてもらえることが嬉しいです。
- ・新しいことを学べるのが楽しいです。

7月第3週の1年生をみる。この時期は英語学習が始まり3ヶ月がたった頃で, 一般動詞も習い, 文を用いて自己表現が少しできるようになった頃である。英語を使ったゲームに取り組みやすく, ま

た種類もたくさん取り入れられる時期でもある。英語を使ったゲームを楽しいと思う生徒が増え, 「ゲームをして楽しく英語を覚えることが楽しい」「ゲームをして楽しみながら授業できること」などの声が聞かれた。また, 「英語学習にチャレンジする喜び」の項目では, 5月同様にたくさんの記述がみられた。記述内容を表1-5にまとめる。

表1-5 「英語学習にチャレンジする喜び」に関する
生徒の記述 1年生 7月第3週

- ・英語が前よりも書けるようになったし, 読めるようになったことが嬉しい。
- ・一番楽しい事は, 英語で話してみんなに伝わったことです。
- ・英語を少しずつだけでも, 話したり, 英語を書けるようになって, うれしかったり, 友達と一緒にしているときが楽しいです。
- ・新しい単語がいっぱいでくることが楽しい。
- ・覚えた単語を使って, 書いたり読んだりできるようになることが楽しい。
- ・テストをきっかけに, 単語や文を練習して, その後はしっかり覚えられてすらすら書けるようになることが嬉しい。

次に, 5月第3週の2年生をみる。1年間英語学習を行ってきた2年生が, 楽しいと感じているのはゲームなど英語を使った言語活動である。また, 「英語学習にチャレンジする喜び」の項目を選ぶ生徒も多く, それも英語学習が楽しみの一つになっている。生徒の声としては, 「英語が分かっていくようになることが楽しい」「内容がちゃんと理解できたとき, なんかすっきりする」「英語を日本語に直すときに楽しい」などがあつた。

また, 2年生で, 英語学習を通しての教科担任との出会いが, 英語学習の楽しさに関わっていることもわかる。1年生の記述では, 「先生が楽しく授業をするのが楽しい」「先生の話聞くのが楽しい」「たまに楽しいことを言いながら授業ができる」「先生と授業をするのが楽しい」という声があつた。

ウ「中学校の英語の授業で困っていることは何ですか」
対象：1年生 214人 2年生 250人
時期：5月第3週 1年生・2年生
7月第3週 1年生 複数回答可

生徒のつまずきはどの時期にどのようにあらわれるのか, 5月の第3週で, 1年生と2年生に, 7月の第3週には1年生の声を聞いてみた。記述式で

回答を求めることにより、具体的に困っている様子がわかるようにした。集計後その回答を検討し、カテゴリー別にわけ、そのつまずきを、大きく分けて「文字」の習得と英語学習や英語の授業への「適応」とし、特に「文字」のなかでは、「語のレベル」の段階でのつまずきと「語の操作レベル」でのつまずきに分類した。「語のレベル」でのつまずきとは、単語を読めない、単語の意味がわからない、単語を書けないなど、単語に関する段階でのつまずきである。また、「語の操作レベル」でのつまずきとは単語と単語を文の規則に従ってならば、文を作る段階、すなわち、語順や文法に関する段階でのつまずきである。

図1-4は中学校の英語の授業で困っていることは何かと聞いたときの生徒の回答をカテゴリーに分類したものである。また、表1-6はその回答のうちわけについて、回答の度数と比率を表したものである。

1年生の5月第3週には、214人中、特に困っていることはないという生徒は108人で、半数近くの子はまだ困ったことがないという結果である。「語のレベル」で問題があると答えた生徒は62人で、「語の操作レベル」で問題があると答えた生徒は23人である。「語のレベル」で困っていると答えた生徒の声を次頁表1-7にまとめる。

生徒が、中学校の英語学習で文字を読むこと、文字を書くことも学習するようになり、「読めない」「書けない」「覚えられない」と生徒が早い時期からとまどっているのがわかる。しかし、特に困ったことはないと答えている生徒は214人中108人おり、これは、本人の努力や、教科担任の熱意や工夫ある取組の成果であると考えられる。

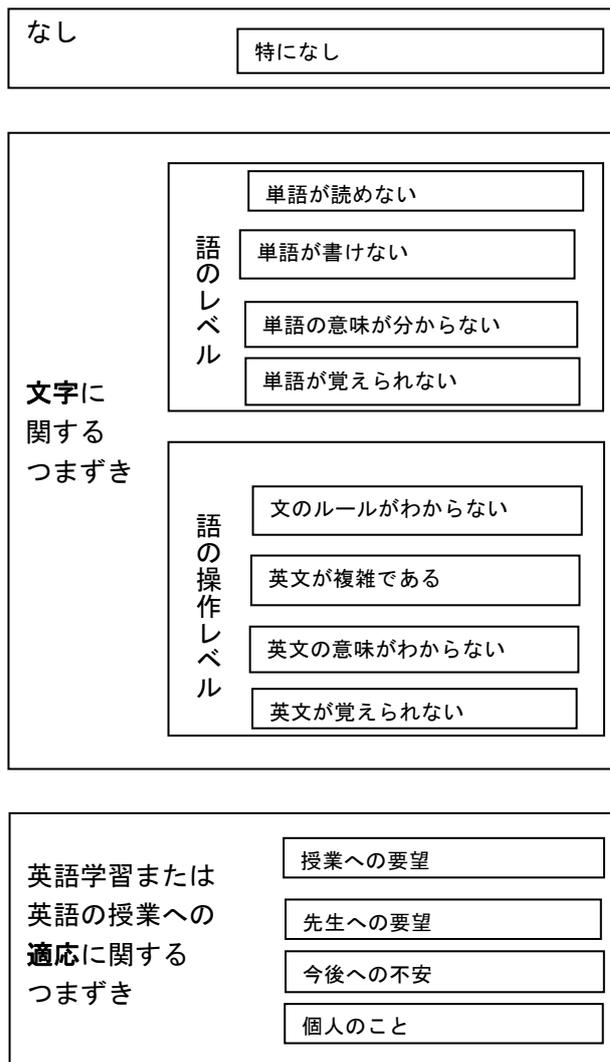


図1-4 「中学校の英語の授業で困っていることは何ですか」複数回答をカテゴリーにわけたもの
対象：1年生 時期：5月第3週、7月第3週
2年生 時期：5月第3週

表1-6 「中学校の英語の授業で困っていることは何ですか」 複数回答可 人()内はパーセント

		1年生 5月第3週 214人 (%)	1年生 7月第3週 213人 (%)	2年生 7月第3週 250人 (%)	
なし		108 (50%)		92 (37%)	
文字に関する つまずき	語の レベル	読めない	19 (9%)	12 (6%)	8 (3%)
		書けない	15 (7%)	23 (11%)	8 (3%)
		意味がわからない	4 (2%)	6 (3%)	7 (3%)
		覚えられない	24 (11%)	29 (14%)	40 (16%)
	語の操作 レベル	ルールがわからない	1 (0.5%)	4 (2%)	12 (5%)
		複雑である	4 (2%)	9 (4%)	23 (9%)
		文の意味がわからない	13 (6%)	9 (4%)	23 (9%)
		文を覚えられない	5 (2%)	13 (6%)	11 (4%)
英語学習 または 英語の授業への適応に 関するつまずき	授業への要望	3 (1%)	6 (3%)	30 (12%)	
	先生への要望	6 (3%)	5 (2%)	4 (2%)	
	今後への不安	3 (1%)	2 (1%)	0	
	個人のこと	8 (4%)	4 (2%)	3 (1%)	
		108 (50%)	94 (44%)	92 (37%)	
		62 (29%)	70 (33%)	63 (25%)	
		23 (11%)	35 (16%)	69 (28%)	
		20 (9%)	17 (8%)	37 (15%)	

表1-7 「中学校の英語の授業で困っていることは何ですか」 「語のレベル」での生徒の記述
対象：1年生 時期：5月第3週

「読めない」
 ・発音しにくい単語があって困る。
 ・ちょっと読み方が違う単語（ローマ字読みではない単語と考えられる）があるのが困る。
 ・単語の発音がちゃんとできないので困る。

「書けない」
 ・単語は少し読めるけど、書けないので困る。
 ・単語があんまり書けないので困っている。

「覚えられない」
 ・単語を覚えてもすぐに忘れるのが困る。
 ・単語がローマ字とはちがう書き方で覚えられないので困っている。

困っていることは「特にない」という生徒がいる一方で、それぞれの時期で、「語のレベル」でつまづいている生徒、「語のレベル」についてはクリアできているが単語を使って文法の規則にしたがって文を作る「語の操作レベル」でつまづいている生徒が、学習が進むにつれて増えてくるのがわかる。2年生の「語の操作レベル」で困っていると答えた生徒の声を表1-8にまとめる。時間の流れとともに、つまづきの原因も変わっていくことがわかる。

表1-8 「中学校の英語の授業で困っていることは何ですか」 「語の操作レベル」での生徒の記述
対象：2年生 時期：5月第3週

「ルールが分からない」
 ・それぞれの単語の意味は知っていても順番にならべて文にする順序が分からない。
 ・単語は覚えても使い方が分からないので、文にできない。

「英文が複雑である」
 ・英語全てが難しい。
 ・文を読むとき、あまり分からないので困る。

「英文の意味がわからない」
 ・文章になると訳すのがむずかしい。
 ・たまに「何を言っているのだろうか？」と思うときがある。

それでは、生徒は今後英語の学習をすることで、どのような望みをもっているのだろうか。1年生の5月第3週と2年生の同じ時期に、1年生については7月第3週にも同じ質問をして、変化についても分析できるようにした。アンケートの質問について記述式で回答を求めることにし、生徒の声が

より筆者に届くようにした。

回答結果は大きく2つのカテゴリーに分けることができる考えた。「英語学習を深めたい」言い換えれば「英語ができるようになりたい」という思いと、もう一方は「英語を生かして何かをしたい」という気持ちがあると考えた。図1-5は記述式の回答の結果をカテゴリーにわけたものである。また、次頁表1-9はそのうちわけについて回答の度数と比率を表したものである。

英語学習を 深めたい	聞く
	話す
	読む
	書く
	英語ができるようになりたい
英語を今後 生かしたい	外国の人と話したい
	外国に行きたい
	外国の人と友達になりたい
	外国の人に道案内したい
	外国の映画を字幕なしでみたい
	英語の本を読みたい
	留学がしたい
	英語を仕事に生かしたい
	資格をとりたい
	入試に合格したい
その他	
特になし	

図1-5 「中学校の英語を学ぶことで今後どのようなことができるようになりたいですか」の複数回答をカテゴリーにわけたもの

対象：1年生 時期：5月第3週、7月第3週
2年生 時期：5月第3週 複数回答可

1年生の5月には英語学習を始めて、「英語で話せるようになりたい」「英語で書けるように」なりたいと思っていることがわかる。そして、英語学習を深めていくだけではなく、将

来には英語を使ったり、英語を生かしたりして何かをしたいとも思っていることがわかる。生徒の声を表1-10にまとめる。

表1-10 「中学校の英語を学ぶことで今後どのようなことができるようになりたいですか」

生徒の記述 対象：1年生 時期：5月第3週

「話す」
・英語をペラペラ話せるようになりたい。
・英語をちゃんとしゃべりたい。
・外国人のように、とぎれずペラペラしゃべりたい。
「読む」
・英文をすらすら読めるようになりたいです。
「書く」
・長い英文を書けるようになりたい。
・英語をかつこよく書きたい。
「英語ができるようになりたい」
・英語が好きだから、もっと好きになれるようにがんばりたい。単語をいっぱい書けるようになりたい。
・もっと英語を知りたいです。
・もっとむずかしい英語の単語を覚えたい。

生徒は、英語学習に期待し、英語を学習することで、話せるようになりたいと思っている。そして、外国へ行ったり、外国の人と会話したりできればよいと考えていることがわかる。しかし、一方では、授業の中でつまずき、自分の思うように英語で表現できなかつたり、自分の思うように英

語で書けなかつたり、話せなかつたりして困っている姿がうかがえる。また、表1-4でみたように、設定された目標にチャレンジしてできたとき、生徒は英語学習の楽しさや喜びを感じていることがわかる。このような生徒の願いに応え、生徒のつまずきに配慮し、さらに、小学校英語活動の成果を踏まえた中学校英語学習の授業をつくるのがこれからの課題であると考えている。

(3) 本市中学生の英語の学力における課題

本市における中学生の英語の学力を考察する。筆者が、中学校で英語を教えているときに、中学生の学力について気がかりだったことは、次の4点である。

①単語は覚えているが、文で覚えていないため、どう使うかわからない。
②文を作るのに、語順がわからない。
③文を丸覚えはするが、応用して自分のことを表現できない。
④英文を書くときには、何をどう書いていいかわからない。

英語を聞いて理解をしたり、英語を読んで理解をしたりすることは、比較的できるように思うが、自分のことを話したり、書いたりすることに、課題があるように感じていた。

表1-9 「中学校の英語を学ぶことで今後どのようなことができるようになりたいですか」

複数回答可 人()内はパーセント

		1年生 5月第3週 214人 (%)	1年生 7月第3週 213人 (%)	2年生 5月第3週 250人 (%)
英語学習を 深めたい	聞く	11 (5%)	6 (3%)	8 (3%)
	話す	94 (44%)	83 (39%)	77 (31%)
	読む	31 (14%)	18 (8%)	20 (8%)
	書く	53 (25%)	50 (23%)	20 (8%)
	英語ができるようになりたい	22 (10%)	18 (8%)	27 (11%)
英語学習を 今後にか したい	外国の人と話したい	41 (19%)	62 (29%)	62 (25%)
	外国に行きたい			
	外国の人と友達になりたい	6 (3%)	8 (4%)	1 (0.4%)
	外国の人に道案内したい	6 (3%)	11 (5%)	10 (4%)
	外国の映画をみたい	2 (1%)	9 (4%)	2 (1%)
	英語の本を読みたい	5 (2%)	4 (2%)	1 (0.4%)
	留学がしたい	1 (0.5%)	0	8 (3%)
	仕事に生かしたい	4 (2%)	6 (3%)	9 (4%)
その他	資格を取りたい	7 (3%)	3 (1%)	20 (8%)
	入試に合格したい			
その他	その他	3 (1%)	4 (2%)	10 (4%)
	特になし	7 (3%)	5 (2%)	18 (7%)

平成17年度12月実施（第3学年）と平成18年度4月実施（第2学年、第3学年）の本市学力定着調査（8）から、今後の課題をみる。

報告書では、調査結果からみた指導課題を3点提示している。表1-11にまとめる。

表 1-11 平成16年12月実施，平成17年4月実施
学力定着調査結果から見た指導課題

- | |
|--------------------------|
| ①場面・状況を意識した言語使用に関わる知識の定着 |
| ②文章や対話の流れの理解力及びそれに応じた表現力 |
| ③自己表現力の向上 |

上記の指導課題を、先に述べた筆者が感じていた生徒の学力で気がかりだったことと併せて今後の指導について考えてみる。

①は、生徒が新しい英語の表現を学ぶときには、その表現の使われる場面や状況を理解していなければならない。そのためには指導者が常にそのことを意識した言語活動を行うことが必要であると考える。また、習った表現については、その時間だけではなく、今後の授業にも言語活動に登場させ、言い慣れることにより、語順のつまずきの解消と、文の中での単語の定着が望めると考える。

②は、まとまった英文を聞いたり、読んだりして大体的内容をつかむ練習をする。また、教科書の対話の一部を換えたり、インタビュー活動やペアワークなどで相手とコミュニケーションをしようとする意識した活動をするにより、対話の中での理解力や表現力の向上が望まれる。

③は、新しく習った表現を使い、自己表現をさせる機会をもち、クラスメートの自己表現を聞く機会ももつことにより、どのように英語では表現すればいいのかがわかる機会となると考える。また、新しい表現を習った時間にだけ行うのではなく、継続して、その表現を使いつづけるという工夫が望まれる。例えば、Q&A活動で用いたり、年間に何度かは自己表現のまとめの時間を取ったりするなど、自分の使った表現を定着させる機会を授業に取り入れることが必要であると考える。文章を書くときの表現方法については、構造的な文の書き方を指導することにより、筋道立てた、まとまりのある文を書くことができるようになる。と考える。「何をどう書いていいかわからない」という課題も解消の方向に向かうと考える。

生徒は、先に述べたように、英語学習に期待し、「英語で話したり、書いたりできるようになりたい」と思っている。英語で話せたり書けたりできるということは、自分の思うことを相手に伝え、相手の言いたいことが理解でき、そしてそれに対して、反応ができるということでもある。しかし、学力定着調査の結果では、生徒の英語における知識の定着が不十分であったり、英語での対話やまとまった英文を理解できなかったり、相手が話すことへの的確な反応ができなかったり、自分のことを英語で表現できなかったりという課題が明らかになっている。このような生徒の課題を踏まえて、生徒のつまずきに配慮し、生徒の望みに応えることのできる指導計画が必要であると考え。

第2節 中学校英語学習の指導計画の検討

（1）小学校英語の必修化をめぐって

本年3月に中央教育審議会の外国語部会は、アジア各国で小学校段階の必修化が相次ぐ中、英語コミュニケーション能力の育成が不可欠として、小学校高学年（5～6年）で平均週1回（年間35時間）の英語教育を行うよう提言した（9）。その内容は、小学校における英語教育の充実の必要性と検討すべき課題として次のことを挙げている。表1-11は小学校における英語教育の充実の必要性と検討すべき課題（10）をまとめたものである。

表1-12 小学校における英語教育の充実の必要性と検討すべき課題

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ①小学生の柔軟な適応力を生かすことによる英語力の向上 |
| 小学生の柔軟な適応力は、コミュニケーションへの積極的な態度の育成や英語音声や基本的な表現に慣れ親しむことに適している。 |
| ②グローバル化の進展への対応 |
| グローバル化が進展する中で、英語の必要性は高まっており、国際的にも急速に導入が進められているとしている。 |
| ③教育の機会均等の確保 |
| 現在では、90%を超える小学校において、総合的な学習の時間などで、英語活動が行われているが、活動の内容や授業時間数には相当のばらつきがある。中学校教育との円滑な接続を図るという観点から、中学校に入学したときに共通の基盤が持てるよう、必要な教育内容を提供することが求められる。 |

本市では、平成6年度より本研究課で小学校英語の研究を行ってきた。平成8、9年度の中村節夫の報告書396 (11), 414 (12) では、小学校英語活動のカリキュラムが示された。その後の研究で、平成10年度に、直山木綿子により「文字の扱い」に関しての検討が行われ (13), さらに、平成11年度には、「言語機能の選択」に関しての検討が行われた (14)。続いて、平成12年度には「言語機能を構成単位とする必要性」についての補足、「言語機能の選択と配列」についての検討が行われた。このような研究を通して、平成14年には「小学校英語活動指導計画と活動事例集 (試案)」 (15) が発行された。現在、この試案をもとに、各小学校の実情にあわせて、カリキュラムが生まれ、取り組まれている。

また、平成17年度からは、概ね2つの中学校区ごとに1名の外国語指導助手 (ALT) が配置されたことにより、中学校と同じALTが全ての校区内の小学校を巡回指導している。以上のことにより、中学校区内の小学校では、概ね同じような英語活動を体験してきた子どもたちが同じ中学校に入学してくることが予想される。中学校の英語科教員は小学校英語活動とのつながりを踏まえて、それに沿った計画的な指導を行う必要がある。

(2) 小学校英語活動での子どもたちの変化

今年度4月には、小学校で、総合的な学習の時間に中学校と同じALTと英語活動を体験してきた生徒が中学校に入学してきた。ALTは全ての校区の小学校で児童と共に活動してきている。研究協力校での1年生の様子を紹介する。今年度の1年生は、筆者が今まで担当してきた1年生と比べると、以下のようなことが特徴的であると感じている。筆者が最近1年生を担当したのが、研究協力校の現在の3年生である。2年前の1年生との比較をまとめる。

- | |
|---------------------------------|
| ① 英語で発音をしたり、英語を口に出したりすることに抵抗がない |
| ② 音声によるインプットに柔軟に対応できる |
| ③ 発表をすることに躊躇しない |
| ④ 英語を使ったゲームに積極的に取り組む |

毎年、生徒も違い、学年の雰囲気も違う。2年前に1年生を担当したときには、校区3小学校のうち、2小学校が英語活動を総合的な学習の時間などで取り組んでいた。1小学校は「英語キッズ」として、放課後に取り組んでいた。授業では一人一人

に英語で質問したり、生徒がペアワークをしたり、クラスの前に出て発表をしたりしたが、何人かの生徒は、発表するのをいやがったり、発表に時間がかかったことを思い出す。今年度の1年生は英語を発音したり、友達と会話をしたりすることを比較的、恥ずかしくならず、楽しんでいるようにみえる。また、英語を使ったゲームにも遊びとしてではなく英語学習として取り組む姿がみられる。小学校英語活動で身につけたコミュニケーションに対する意欲や力を、さらに中学校で伸ばしていく必要性を強く感じる。

生徒の様子から、小学校英語活動が楽しく行われていたことが感じられる。そこで、小学校英語活動について1年生と2年生の5月第3週にアンケートをとり、生徒の意識を聞いてみた。先に述べたように1年生は全ての生徒が中学校と同じALTと、または小学校の担任の先生と一緒に英語活動を体験している。小学校の英語活動でどのような気持ちで活動していたか、図1-6～8にまとめる。

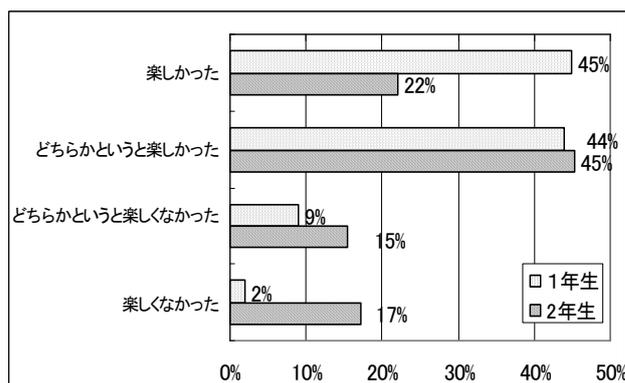


図1-6 「小学校の英語活動について、楽しく活動しましたか」
対象：1年生 人数：214人 2年生 人数：181人
時期：5月第3週

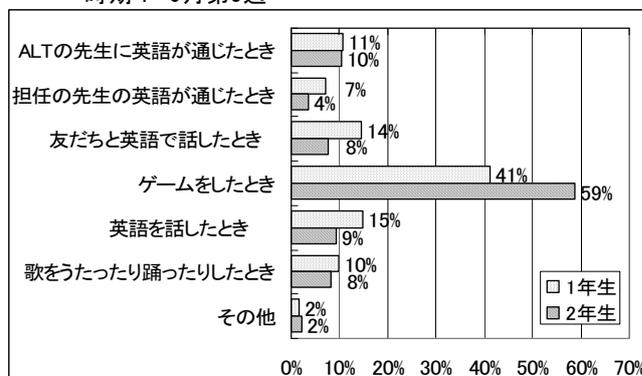


図1-7 「楽しかった、どちらかというと楽しかったと答えた人に質問します。どんなとき楽しかったですか」
対象：1年生 人数：214人 2年生 人数：181人
時期：5月第3週 複数回答可

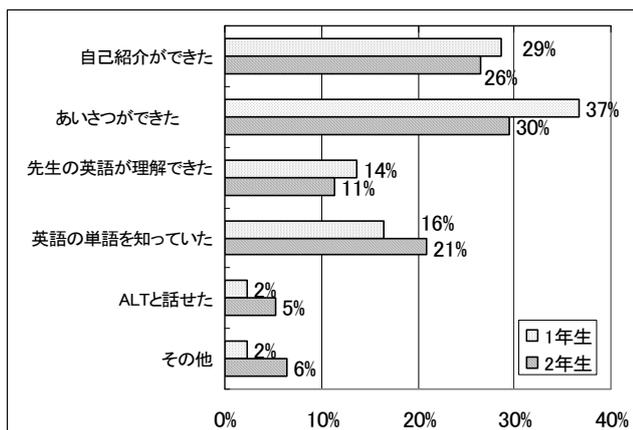


図1-8 「小学校の英語活動は、中学校の英語の授業で
どんなことに役立ちましたか」

対象：1年生 人数：214人 2年生 人数：181人
時期：5月第3週

1年生では191人で、全体の89%の生徒が小学校の英語活動を思い出して、「楽しかった」「どちらかという楽しかった」と思っていることがわかる。内容を見ると、「ゲームが楽しかった」と思っている生徒が148人で、全体の69%いることがわかる。中学校の英語学習でどんなことに役立ったかという質問では、「あいさつができた」と答えた生徒がもっとも多く、「自己紹介」「英語の単語を知っていた」とつづく。

2年生は小学校英語活動を経験した生徒181人がアンケートに答えている。英語活動が「楽しかった」「どちらかという楽しかった」という生徒は122人で全体の67%であった。「どんなとき楽しかったですか」という質問には、「ゲーム」と回答する生徒が最も多かった。「中学校の英語の授業で英語活動がどんなときに役に立ちましたか」の質問にも、1年生の答えとほぼ同じになっている。このことから、小学校では英語活動を楽しみ、中学校に入学してからの英語の授業では、小学校英語活動を通して、あいさつができた、自己紹介ができた、英語の単語を知っていたと思っていたことがわかる。

(3) 小学校英語活動からつなぐ3つの視点

小学校では、「本市指導計画と活動事例集（試案）」をもとに、タスクを中心とした活動が行われている。タスク(16)とは、一般的に「作業」とか「課題」と訳されている。以下に説明する。

試案では、言語機能、語彙、場面、話題、活動で構成されたものを「タスク」と呼んでいる。

「活動計画（試案）」では、学習内容として設定された言語機能の具体表現が無理なく自然に聞いたり、話したりされる場面と話題とを児童の生活や学習経験から選択して、活動が組み立てられている。

生徒は小学校英語活動で、タスクを中心とした

活動を通して、「人と言葉でつながるよろこび」を感じ、その活動の中で、たくさんの英単語を使い、英語であいさつができた、自己紹介ができた、先生の話す英語を理解しようとする態度も身につけたりする。中学校の英語の授業では、小学校英語活動での成果であるコミュニケーションに対する意欲や、ついた力をさらに伸ばしていく必要性を感じる。

また、生徒は英語の授業の中で、英語を使ったゲームや、友達との英語での会話では自己表現をすることを楽しいと思っており、また多くの生徒が設定された目標にチャレンジすることにも喜びを感じていることがうかがえた。しかし、一方で、語のレベルでつまづいて困っている姿や、語の操作レベルでつまづいて困っている姿も見えてきた。また、学力定着調査の結果では、特に表現の力に問題があることもわかった。これらのことより、生徒の学びのプロセスを知り、小学校英語活動のよさを中学校の英語学習に生かし、さらにコミュニケーションに対する意欲や、生徒の願いである英語の力を伸ばすために、現行の指導計画に3つの視点を加える必要があると考えた。図1-9にまとめる。

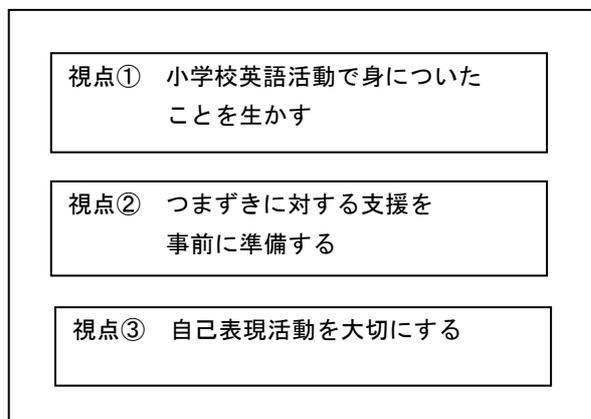


図1-9 小学校英語活動から中学校英語学習への
接続のための3つの視点

視点①は「**小学校英語活動で身についたことを生かす**」である。生徒は、小学校英語活動を経験するなかで、英語を口にすることに比較的とまどいがなく、英語を使つての発表を躊躇なくすることができる。英語を使った活動に対しても積極的に行う。中学校では、段階を高めた活動にし、目標を設定することにより、チャレンジする楽しみを得られるようにする。

視点②は、「**つまづきに対する支援を事前に準備する**」である。英語はできるようになりたい、わからないから意欲がもてないということになら

ないように考える。危惧される生徒のつまづきを予想し、手立てを用意しておくことにより、学習意欲の低下を防ぐことができると考える。

視点③は「自己表現活動を大切にする」である。アンケートの結果から「英語を話したい」「英語を書きたい」との生徒の願いを受け止め、自分のことや自分の思いを表現したり、自分の言いたいことが英語で表現できたりする機会を授業の中で取り入れたいと考える。

以上、生徒の願いや実態を知り、この3つの視点を、今一度、授業のなかで指導者が意識することにより、小学校英語活動の成果を踏まえた、実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指す、中学校の英語学習を支える活動ができるようになると考えている。

- (1) 多田泉「No. 485 実践的コミュニケーション能力の系統的育成を図る英語学習の在り方」『平成15年度研究紀要』京都市総合教育センター 2004. 3
多田泉「No. 495 実践的コミュニケーション能力の系統的育成を図る英語学習の在り方」『平成16年度研究紀要』京都市総合教育センター 2005. 3
- (2) 中学校指導要領(平成10年12月)解説―外国語編― 1999. 9
文部省 p. 6
- (3) 前掲(1)p. 7
- (4) 前掲(1)p. 9
- (5) 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画 2003年3月
文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf
2007. 1. 16
- (6) 京都市教育委員会 『「ALTを活用した小中連携英語教育の充実・推進」～英語が使える「京都っ子」の育成にむけて～』
京都市教育委員会 2005. 4
- (7) 前掲(6)
- (8) 「学力定着調査」報告(中学校 英語) 2004年12月, 2005年4月
京都市教育委員会 pp. 6～8
- (9) 「小学校における英語教育について」(外国語部会における審議の状況)(案) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 外国語専門部会(第14回)議事録・配布資料 2006. 3. 27
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyoku/chukyoku3/siryu/015/06032708.htm 2007. 1. 16
- (10) 前掲(9)
- (11) 中村節男「No. 396 自発的な発話を目指した小学校英語カリキュラムの作成―意思伝達のアプローチによる指導―」『平成8年度研究紀要』京都市立永松記念教育センター 1996. 3
- (12) 中村節男「No. 414 自発的な発話を目指した小学校英語カリキ

ュラムの作成Ⅱ―機能―構造編成による指導内容の体系化―」『平成9年度研究紀要』京都市立永松記念教育センター 1997. 3

- (13) 直山木綿子「No. 434 中学校との連携を見据えた小学校英語活動の改善点―小学校高学年における『文字』導入の試み―」『平成10年度研究紀要』京都市立永松記念教育センター 1998. 3.
- (14) 直山木綿子「No. 438 小学校英語カリキュラムの改善―『話題』と『文字の読み指導』を取り入れたカリキュラムのモデル案―」『平成11年度研究紀要』京都市立永松記念教育センター 1999. 3.
- (15) 京都市小学校英語活動実践研究グループ『小学校英語活動指導計画と活動事例集(試案)―STEP 1～4―』京都市教育委員会 2002. 11
- (16) 直山木綿子『英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てるための22のヒント 小学校英語活動Q&A』京都市教育委員会 2003年2月 p. 6

第2章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成で大切にしたい3つの視点

第1節 視点① 小学校英語活動で身についたことを生かす

(1) 小学校での英語活動

生徒は、小学校英語活動を経験することを通して、英語を口にすることに比較的戸惑いがなく、言い間違いを恐れずに発言できる。また、英語を使つての発表を躊躇なくすることができ、英語を使った活動に対しても積極的に参加する。また、相手の話す表情を見ながら、知っている単語やフレーズを聞き取って何を言っているのかと理解しようとする態度が育っている。このように生徒が小学校英語活動を通して身につけたものを中学校でも伸ばしていきたいと考える。中学校の英語の授業では、カードなどを使った活動や友達との会話や、グループで活動することにより、小学校英語活動で行われてきた活動のよさを生かしながら、段階を高めた活動となるように、目標を設定する。そして、生徒が、チャレンジする楽しみを得られるようにすることが望まれる。

小学校英語活動はどのように行われているのかを知るために、筆者は今年度に入って、いくつかの小学校英語活動を参観した。中学校に勤務しているときには、興味があったが、残念なことに参観の機会がほとんどなかった。何度かの参観を通して、こんなことまで、小学校英語活動で経験し

ているのかと思った。

中学校では、生徒の発達段階から、まわりを気にして、恥ずかしがってやりにくかった活動や、簡単なゲームを通して学ぶことなどが小学校の児童には、無理なくできることが感じられる。また、学習活動に必要な語彙は中学校でも取り入れるが、中学校の教科書で扱われない単語を児童が知っていることもあった。

例えば、ある小学校2年生の活動を参観した時には、児童は“Where’s Spot?”（「スポットはどこ？」）という本の読み聞かせをしてもらっていた。その絵本の中には、いくつかの家具の名前が出てくる。それらの単語を使い、スポット（犬）のかくれている場所を当てるゲームをしていた。そのゲームで使われた家具の単語は、door, bed, clock, basket, piano, box, closet, rug, stairsであった。closet, rug, stairsは中学校英語の教科書では扱われないことが多い単語である。また、この年齢の児童は、この簡単なゲームを、全体で、グループで、飽きることなく、長い時間楽しんで活動していた。

小学校4年生の活動を参観した。児童はここでも絵本の読み聞かせをしてもらっていた。その絵本に出てくる動物や、それらを表現するための形容詞を使つての活動であった。ある児童が好きな動物を当てるのに、“It’s yellow.” “It’s big.”など、いくつかのヒントがその児童生徒から英語で出される。そこで使われ、児童が聞き取って理解していた形容詞は、絵本に載っていたもので、short, tall, big, small, pretty, scary, jumpy, fierce などであった。担任の先生とALTはこれらの形容詞を、日本語を使うことなく絵本や、動作で児童が理解できるようにしていた。scary, jumpy, fierceは中学校英語の教科書では扱われないことが多い形容詞である。

小学校5年生の活動では、始めのあいさつのあとに、日直が5人ぐらい前に立って、司会をしていた。その一人ずつの日直に向かって、他の児童全員で、“How old are you?”と質問すると、質問された児童が“I’m eleven.”と答える。すると、他の児童全員で、“He (She) is eleven.”と言っていた。人称代名詞を使っていたのである。

小学校6年生の活動では、児童は自分のとんがり帽子を作るために、頭の大きさを測っていた。“How many inches is your head?” “It’s twenty-one and a half inches.”と言っていた。How many～の表現は、チャンツで何度も練習をしていたが、

はっきりと発音していた。名詞の単数、複数の違いも知っているようであった。別の小学校での6年生の活動では、児童が英語で言いたい、発表したいという思いが伝わってくるがあった。担任の先生の「まだ、当たってない（指名されて答えていない）人」という問いかけに、まだ指名されていない児童が、「ぼく、ぼく」「わたし、わたし」と声が聞こえてきそうなほどの勢いで手を挙げていた。中学校で英語を教えている筆者には大変新鮮な場面であった。筆者が感じた英語活動での児童の様子を以下にまとめる。

＜筆者が感じた英語活動での児童の様子＞

コミュニケーション能力の基礎に関すること

- ① 担任の先生や、ALT の話す英語が少々理解できなくても、不安になることなく、何を話しているのかを推測する姿が見られる。
- ② ALT との活動や、友達同士の活動で、視線をあわせて（アイコンタクト）会話ができる。
- ③ ALT に対して、物怖じせずに接することができる。

英語力の基礎に関すること

- ① 長い単語を発音するときには、正確には発音できなくとも、リズムで発音しようとしている。
- ② 小学校によっては、高学年で、形容詞をたくさん知っていたり、人称代名詞を使っていたり、単数・複数の違いを知っていたりする。
- ③ 疑問詞を使った表現が理解できる。

児童の発達段階に関すること

- ① 低学年・中学年では、一つの簡単なゲームでも飽きることなく長時間活動できる。
- ② 間違っって発音したり、言い間違ったりすることを恐れない。
- ③ 自分の話す英語を発表したい、聞いてもらいたいという思いをもっている。

(2) 指導計画の中の視点①

小学校の取組により活動は様々であるが、児童には英語活動を通してコミュニケーションに対する意欲や、話される英語を理解しようという態度や、英語を使ってみたいという気持ちが育っていると考えられる。このような英語活動のよさを生かすために、指導計画に視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」を加えた。次頁表2-1は中学校第1学年の指導計画の1部であり、丸みを帯びた枠で囲ってあるのがこの視点①である。

表2-1のUnit1 Lesson3の指導計画を説明する。ここでは、一般動詞の肯定文、疑問文とその答え方を扱っている。視点①を意識する活動では、カ

ードに絵とそれを表現するのに使う動詞を書いておく。生徒がペアになり、2人の間にカードを裏返して山積みにする。1枚ずつめくって、“I like baseball.”などと早く言えたほうがカードをもらう。という小学校英語活動を意識した活動となっている。カードを使い、英語をたくさん発音することで、一般動詞の肯定文の定着を目指す。このような、絵カードを用いたり、動作を伴ったりする活動を授業に取り入れる。小学校英語活動の内容よりも段階を高めているが、楽しみながら学習を進めることができると考える。また、指導計画の留意点には、小学校英語活動で習ったと思われる単語やフレーズも記しておくことにより、新出語句や文法の導入時に生徒が知っているかもしれないと知りながら導入ができると考える。また、章末表2-3に第1学年の年間指導計画を記す。

第2節 視点② つまづきに対する支援を事前に準備する

生徒はアンケートから「英語を話したい」「書きたい」と望み、意欲的に学習をしようとしていることがうかがえると先に述べた。学習意欲を高めるために授業で大切なことは、生徒につまづかせないように配慮することである。しかし、現実には生徒は授業の中でつまづき姿が見られる。事前

に生徒のつまづきが危惧されるところでは、それらに対しての手立てを用意しておくことを考えたい。生徒の予想されるつまづきに対して大切にしなければならない点は以下の3つである。

- | |
|---------------------|
| ①どこでつまづくのか |
| ②なぜつまづくのか |
| ③どのような、支援・手立てが必要なのか |

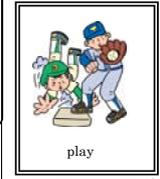
生徒のつまづきやすい項目について具体的に述べる。

(1) 文字の導入時におけるつまづきについて

小学校英語活動では、文字を読んだり書いたりする必要はなく、フレーズや文も文字を通しては学んでいない。大体の発音を模倣し、リズムで英語を口にしてきたのである。そのため英語を聞き取ったり、口にしたりするのは得意であるが、まだ正確に読めない。文字と音のつながりも知らない。そのため文字の導入時には単語を見て、ローマ字と違う綴りに戸惑い、「正しく読めない」とつまづく可能性がある。

そこで、このつまづきを克服するために、単語の綴りと発音を一致させるような活動が必要である。単語の中の文字を指差しながら、その文字のもつ音を確認したり、文字を見せながら発音をしたりするなど、従来よりも時間をかけて指導する必要がある。単語を書けるようにする活動もペア

表 2-1 第1学年指導計画 Unit1 Lesson3

Unit 1 Lesson 3 新しい友だち, リサ											
時	Part	言語材料	指導過程・内容	留意点	評価規準・評価場所・方法 (下線: 実現状況評価)	観点別評価					
						関	表 理 知				
3	p.32~ p.33	I like~. Do you ~? Yes, I do. No, I don't. What do you ~?	<p>① ビンゴ スポーツ・動物・食べ物・教科の語彙を教える。カードを使い、各班で、語を聞き取るカルタや、カードを使って英語を言う練習をする。</p> <p>カード絵とともに like, play, have, want, love の単語を書いておく。2人で、山積みにしたカードを表にむけ、I like volleyball. など早く言えたほうが、カードをもらう。しんけいすいじやくのゲームもできる。必ず英語の文を言うようにする。</p> <p>① 好きなものをペアで会話する。プリントあり。 スポーツ・食べ物・動物・教科 I like cats.</p> <p>② Activity1 聞き取り活動</p> <p>③ 新出語句の導入 発音練習</p> <p>④ 本文の概要把握</p> <p>⑤ 本文の音読練習</p> <p>⑥ まとめ (ノート指導)</p>	<p>小学校英語活動で使った語彙を用いてカルタ遊びをすることにより様々な語彙を思い出す。また、動詞を含めて練習することで、よく使う動詞の定着の手助けとなる。ゲーム形式でスピーディーに行い、何度も発音できるようにする。次の時間にでてる want は自己表現にはよく使うが、like や play に比べると定着が低い動詞であるので積極的にカードゲームに取り入れる。</p> <p>小学校英語活動では「欲しい」というときには、please を使ってきたので、一部の子は please を「欲しい」と理解している傾向にある。 I want a dog. A dog, please. の意味の違いや、使い方の違いを犬のぬいぐるみや、犬のカードを用いて実演してみても実際の場をみせて理解できるようにする。</p> <p>一般動詞を使った自己表現は Unit1 のまとめの自己表現として、スピーチに使うことを意識して取り組んでおく。</p> <p>cats は複数のネコである。a cat は1匹のネコのことであり、不特定のネコである。the cat は特定のネコのこと、今話題になっているネコのことである。この違いを生徒たちは言葉だけでは理解できない可能性があるため、言葉と共に絵を提示することにより、理解ができ、記憶に残りやすくする。</p>	<p>① 積極的に活動に参加している。【観察】</p> <p> play I play baseball. とする。</p> <p>② <u>Do you ~? の形と意味と使う状況、答え方がわかる。</u></p> <p><u>What do you ~? の形と意味と使う状況、答え方がわかる。</u>【観察・定期テスト】 対話の内容がわかる。</p> <p>③ 【発問・観察】</p> <p>④ しっかり口を動かし正しく発音しようとする。【観察】</p> <p>⑤ 本文の内容を理解できている。【発問】</p> <p>⑥ 正しい強勢、区切り、イントネーションで音読できる。【観察】</p>	○	○	○	○	○	○

で行うなどの工夫が必要であると思われる。

新しい表現の導入については、従来通り音声先行で行うが、音声でのインプットを十分に行ってから、文字の提示を行う。生徒は音声でのインプットには思っている以上に柔軟に対応ができると思われる。

(2) 語順についてのつまずきについて

英語で表現するとき、日本語で考えたままの語順で単語を並べてしまうというつまずきが予想される。

そこで、それらのつまずきに対する手立てとして、口頭練習を重ね、使い慣れることが必要である。また、理解力の高い子どもも語順に対して戸惑うこともある。それに対しては、ある時期に、日本語と比較して、英語には助詞がないことや、英語では「だれが」「どうした」という、「主体が何をした」という語順が中心になるという英語の特徴的なことを簡単に説明し、知識を整理させることも必要であると思われる。

(3) 単語の使い方に関するつまずきについて

例えば、動詞のwantの導入時には、小学校英語活動では何かを欲しいとき、また望むときにはpleaseを使ってきた。そのため、pleaseを「欲しい」と理解しているというつまずきが予想される。

そこで、それらのつまずきを克服させるため、wantとpleaseを使った英文を提示し、比較する。

名詞の複数形の導入時には、既習の冠詞 a, the を使った語句との違いに触れる。冠詞や、複数形などは、日本語を使うときにはあまり意識されないため、例えば、a cat, cats, the catの語句の違いが理解しにくいというつまずきが予想される。

そのため、それらを理解するために、絵を用いるとその助けになると考える。a cat は不特定なネコのことであり、1匹のネコという意味である。catsはネコの複数形である。the cat は特定のネコのこと、今話題になっているネコであり、話している人の間でこのネコと特定されているネコのことである。言葉での説明はむずかしくなりがちであるので、説明とともに絵を提示することは、記憶に残る助けになると考える。それらのことは表2-1の指導計画の留意点に、太枠で記した。教材研究の際には最後に生徒の視点で見直し、事前につまずきが危惧されるところでは支援の手立てを用意しておくということが、生徒一人一人を大切

にした授業を構築するということにつながると考える。

第3節 視点③ 自己表現活動を大切にする

(1) 自己表現活動とは

表2-1の指導計画で、点線で囲んである枠が視点③「自己表現活動を大切にする」である。自己表現活動とは、生徒が自分自身で考えたことを表現する活動である。つまり、生徒が自分自身で考えた新しい情報を発信したり、やり取りをしたりする活動を指す。

生活の中で行われる活動の多くは自己表現活動である。田中武夫は、「たとえば、日記をつけること、手紙を書くこと、あいさつをすること、絵を描くことなどはすべて自己表現活動です。私たちは、意見を述べたり気持ちを感情に表したり、まわりの人に相談したりと、毎日のように自己表現活動をしています」(19)と述べている。英語の授業の中でも、様々な自己表現活動を行っている。たとえば、あいさつや授業の始めのQ&A活動、新しい語句や、文型を使った自己表現活動などである。

この英語での自己表現活動について述べる。この活動では生徒が今までに知っている語句や英文を使うことになるので、小学校英語活動での経験が生かされる。そして、それぞれの生徒の自己表現活動を通して英語学習がどれだけ定着しているのか、また、どこが理解できていないのかを知ることができ、それを指導にむすびつけることができると考える。

(2) 年4回の自己紹介のスピーチ

また、自己表現活動のなかで、スピーチという活動について述べる。生徒は「英語を話したい」「英語を書きたい」と望んでいる。自分の言いたいことを英語で表現したり、友達と英語でやり取りをしたりすることを望んでいるのである。この望みをスピーチの活動に取り入れたいと思う。また、スピーチは話したいことを話すという活動と、準備するために、英語でそれを書くという活動がある。また、発表を聞くという活動、その内容を理解して、質問するという活動もある。「聞く」「話す」「書く」の活動を行うことができるのである。このスピーチを年間4回行うように計画した。

第1回は、Unit1のLesson1で、自己紹介を学んだときに行う。自分の名前、愛称、好きなことを紹介する内容である。第2回はUnit1が終了したと

きである。ここでは一般動詞を使って、自分の好きなことや、スポーツなどの内容で行う。第3回はUnit2終了時に行う。ここでは、人称代名詞を使って、第3者のことも言うことができる。第4回は、Unit3終了時に行う。ここでは、canを使った表現を加えることができる。

従来の自己表現活動におけるスピーチは、筆者の経験では、英文を覚えての発表であり、自己紹介も多くは、画一的な表現が使われていたように思う。自己表現としてはやや消極的な印象であった。しかし、生徒の英語学習に対する望みのなかで、多くの生徒が望んでいたのは、「英語を話したい。書けるようになりたい」であった。それは、自分のことが表現できて、相手の言うことも理解したいということである。その望みに「自分」を語るスピーチを通して応えたいと考える。

スピーチを通して大切にしたいことを述べる。自己紹介のスピーチは、自己表現活動の中でも、より内なる自分にせまり、自分とはどのような存在なのかを考え、それを表現できる活動である。中学生という多感な時期に、自分を見つめて、自分は何を好んでいるのか、何をしたいのか、何を望んでいるのか、何かに対してどのように思っているのか、また、過去の自分はどうだったのか、今後はどうありたいのかなど、自分の内面へのインタビューを自分自身で行うことは、自分探しをするというこの時期、この年齢だからこそ意味があると考えられる。また、それを英語でできることは、英語学習において大きな意義があると考えられる。なぜなら、自分のスピーチを通して学んだ英語表現は、自分を語る言葉であり、それは自分の中を通り抜けて発話された自分の言葉だからである。自分の言葉であるのでその個人のなかでのしっかりとした英文の定着が期待できる。

また、スピーチは、生徒の精神的発達段階に合ったものを目指したいと考える。筆者の経験では、スピーチは自分の言いたいことの羅列型が主流であったように思うと先に述べた。それは、第1学年の時期としては、使える単語や、文型が限られていたからでもある。しかし、生徒の発達段階を考えると、もっと深く説明したいとか、もっと内面的なことも表現したいと考えている生徒もいるのではないかと思う。そこで、スピーチは、限られた語彙数や、文型ではあるが、まとまりのある、やや構造的なものを目指すため、英語科におけるスピーチの型（話型）を提示する。この時期に自分の表現したいことを、やや構造的に考える方法

を身につけることで、英語を通してだけでなく、母語である日本語でもまとまりのある文章が書けるようになることも望めるのではないかと期待している。

以上のことから、スピーチにおける自己表現活動の中で大切にしたい3点をまとめる。

1. 自己を見つめること
2. 自分自身に関することを構造的、論理的に、筋道立てて表現すること
3. 英語による自己表現活動を通して母語による言語能力を高めることを目指すこと

次に、スピーチを行うに当たっては、4つの姿を大切に進めていきたい。

1つ目は、話したい内容があるという姿である。自分の思いや、考えがあり、生徒が今までに経験したことや、それに対する感情や感想など、相手に伝えたい内容があるということである。それを考えることにより、自分の思いや考え、願いや感想などがはっきりと意識される。

2つ目は、自分の思いを表現できる力があるという姿である。自分のメッセージを伝えるという目的達成のために、文字で表現したり、話し言葉で表現したりする。ここでは、トピックにわけて考える方法で、まとまりのあるスピーチを目指すためスピーチの型（話型）を提示する。しかし、その話型を使いスピーチを組み立てるが、後にはその話型にしばられることなくそれを使いこなして自分の思いが表現できることを目指したい。

3つ目は、お互いが語ることを受容的に聞き合う姿である。スピーチをするには、聞き手が存在する。相手に自分の思いが伝わるように、顔を上げて、大きな声で、わかりやすく、気持ちを込めてスピーチをする。一方、聞き手は、話し手を意識し、よい聞き手になるように、誰かがスピーチをしているときには、話し手の方を向き、話し手のスピーチを、うなずきながら、受け止めながら、共感しながら聞く。話し手がスピーチの中で言葉として表現できなかった部分も聞くような気持ちで、内容を聞くようにする。そして、スピーチについての反応をする。具体的には感想を言ったり、質問をしたりする。話し手は、質問に答えるなかで、また自己と向き合う機会を与えられ、より内容を深めたものとなる。

4つ目はスピーチをすることによる自己の内面的な深まりがあるという姿である。構造的でまとまりのあるスピーチを考え、相手を意識してスピ

一歩を行うことで、新たな自分が見えてくる。また、先に述べたように聞き手からの質問に答えることで、聞き手を通して、自分を再発見できるのである。

以上4つの姿を表2-2にまとめる。

表 2-2 スピーチにおける4つの姿

① 話したい内容を持っている姿
② 自分の思いを表現する力がある姿 (英語科における話型指導)
③ お互いが語ることを受容的に聞き合う姿 (聞き手を意識した話し方とよい聞き手の育成)
④ 自己の内面的な深まりのある姿 (聞き手を通しての自分の再発見)

年4回のスピーチを通して育てたい姿は、単に英語を使って自分の言いたいことを羅列して話す姿ではなく、まとまりのある、やや構造的なスピーチをすることを通して自己を見つめる力を高める

姿である。また、よい聞き手の姿である。英語を学ぶことで、英語科だけではなく、母語の言語能力の高まりも期待したい。また、先に述べたように自己表現活動を授業に入れることで、一人一人が、どこにつまずいているのか、どこまで知識が定着して、英語が使えているのかがわかる。また、指導者も自分の授業を見直すきっかけとなる。このことから、授業の中での指導と評価の一体化を図りたいと考える。

中学校英語学習では、日々の授業での自己表現活動や、スピーチを通して、応答的な会話ができるということにとどまることなく、人と人が出会い、その出会った人が、自分にとって、互いに影響を及ぼしたり、互いに高めあったり、感情を共有したりするような人間的なふれあいができるような、「実践的コミュニケーション」をも視野に入れておきたいと考えている。

(19) 田中武夫・田中知聡『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店2003.12 p.10

表 2-3 第1学年 年間指導計画

【 1学年 英語 年間指導計画表 】(教科書：教育出版 ONE WORLD English Course 1)

留意点の枠の説明		
丸枠：小学校英語活動で身についたことを生かす	太字枠：つまずきに対する支援を事前に準備する	点線枠：自己表現活動を大切に
○	□	⋯

単元	学習項目	指導内容	実践的コミュニケーション能力の基礎の育成のための留意点	評価方法・場面等	関	表	理	知
4月	Starting Point (8h)	・クラスルームイングリッシュ (あいさつなど) ・アルファベット ・身近な単語 ・自己紹介	・クラスルームイングリッシュ ・アルファベット (大文字、小文字) ・身近な単語の聞き取り ・自己紹介の表現	動物、食べ物、スポーツ、色のカードを使った活動をするによりたくさん英単語を使う。	観察	○		
		<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 自分の名前はローマ字で書けるようにする。 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> それぞれのアルファベットのもつ音を十分知らないと考えられるので、それぞれのもつ音を教えたり、単語として発音されるとき音を文字を伴って教えることにより文字のもつ音をわかるようにする。 </div>	テスト テスト ワークシート	◎			○
5月	Unit 1 Lesson 1 (6h)	・自己紹介 ・紹介内容の確認や訂正 ・第1回スピーチ	・be動詞(am, are)の文とその疑問文及び対応、否定文 ☆Task	生徒が発表する機会をこの時期に多くもつように活動を用意する	観察	○		
		<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 名前、愛称、出身、好きなものについて、簡単な自己紹介をする。また、スピーチに対する質問をさせる。質問に答えることで、自分について、考える機会をもつ。 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 文字を正しく書けないことが予想されるので、授業で教師が確認する機会と時間を設定する。また、音声と文字が一致しないと考えられるので、発音された単語を書くなど、授業の中で、自分のまちがいがいに気付いたり、直したりする機会をもつことにより、だんだん音と文字が一致できるようにする。 </div>	観察 テスト 観察	○	◎	○	○

月	単元	学習項目	指導内容	実践的コミュニケーション能力の基礎の育成のための留意点	評価方法・場面等	関	表	理	知
6月	Unit 1 Lesson 2 (6H)	<ul style="list-style-type: none"> 人の紹介、物や場所の説明 知らないものについて尋ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> be動詞(is)の文と、その疑問文及び応答 疑問詞(What)の疑問文と応答 orを含む疑問文 ☆Task 	<p>リズムに乗って英文を発音したり、カードを使ったゲームなどを取り入れたり、何度も発音する機会をもつ。</p> <p>aとmy, yourを同時に文の中で使ってしまう可能性があるため、何度も文の形で使い慣れることにより、同時に使ってしまうことを避ける。aとanの使い方についても例を挙げて慣れるまで口頭練習することにより、使い方の違いに気付かせる。</p>	観察(ロールプレイの対話) テスト 観察	◎		○	○
7月	Unit 1 Lesson 3 (10H)	<ul style="list-style-type: none"> ある話題(日常生活、趣味など)についての情報交換 第2回スピーチ 	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の平叙文、疑問文及び応答、否定文 疑問詞(What)+doの疑問文とその応答 How manyの疑問文とその応答 ☆Task 	<p>動作を伴った言語活動を工夫し、活動しながら学べる場面を作る。音声先行で音読練習を行ったり、動作を伴ったり、ペアで読んだり、変化をつけて取り組む。</p> <p>前置詞in, on, atの使い方は図に示して提示することにより、イメージをもたせる。複数形のsの発音は、口頭練習を多くすることにより発音の違いを意識させ、自分でも発音ができるようにする。</p>	観察(ロールプレイの対話) テスト ワークシート	◎	○	○	○
8月	Unit 2 Lesson 4 (8H)	<ul style="list-style-type: none"> 時刻について 知らない人についての質問や情報交換 指示や注意を促す 	<ul style="list-style-type: none"> What time? What time do you ~? 疑問詞(Who)の疑問文とその応答 命令文の表現 ☆Task 	<p>命令文や月の名前の学習に動作を伴った活動を取り入れる。</p> <p>音声では理解できるが、英文を正しく書けない子もいるので、授業で、ディクテーションを取り入れ、自分がどんな単語が書けないのかを自分で確認できるようにする。書けない文は何度も授業の中で書く指導をする。</p>	観察 テスト (ロールプレイの会話) 観察	○	○	◎	○
9月 10月	Unit 2 Lesson 5 (11H)	<ul style="list-style-type: none"> その場にはいない人についての質問、又、説明 予定や場所の情報交換 第3回スピーチ 	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞(Does)の疑問文とその応答 三人称単数現在形を含む文 疑問詞(When, Where)の疑問文とその応答 ☆Task 	<p>生徒に誕生日はいつかを聞いたり、どこに住んでいるかを聞いたりして、音声を先行させて授業を進める。</p> <p>3単現のsについては、動詞の原形のまま使ってしまう可能性があるため、何度も口頭練習をする。また、自分の友達や家族について表現する活動を取り入れ、使い慣れることにより、正しい英文が言えるようになる。</p>	テスト 観察		○	◎	○

月 年	学 習 項 目	指 導 内 容	実践的コミュニケーション能力の 基礎の育成のための留意点	評価方法・ 場面等	関	表	理	知	
11 月 12 月	Unit 3 Lesson 6 (8H)	<ul style="list-style-type: none"> ・「できること」について ・「できるかどうか」について ・依頼する 	<ul style="list-style-type: none"> ・助動詞 (Can) の平叙文・疑問文とその応答 ・助動詞 (Can) [依頼]の疑問文とその応答 ☆Task	<p>can を使った疑問文・否定文と do や does を使った疑問文・否定文の作り方の違いがわからない可能性もあるので、どちらもまぜて口頭練習をする機会を増やし、言い慣れるようにする。</p> <p>ペアでスキットの発表をする。</p>	観察(ロールプレイの対話)	○	◎		
	Unit 3 Lesson 7 (11H)	<ul style="list-style-type: none"> ・今している事についての説明や情報交換 ・誰のものかを尋ねる ・第4回スピーチ 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在進行形の文、疑問文とその応答 ・疑問詞 (Why) の疑問文 ・疑問詞 (Whose) の疑問文と応答 ☆Task	<p>進行形の文型では be 動詞が欠落する間違いが多いので、口頭練習を十分行い、正しい英文が言えるようにする。疑問詞や、前置詞の復習は、Q&A で毎回行い、生徒は答えることにより、スパイラルに練習をする機会をもつ。</p> <p>チャットを 40 秒以上続ける。第 4 回スピーチは深まりのある内容で 30 文以上を目指す。</p>	ワークシート テスト	○	○		○
1 月 2 月	Unit 4 Lesson 8 (8H)	<ul style="list-style-type: none"> ・過去のことに ついての情報交換 <p>会話でよく使う言葉や、反応、つなぎの言葉を使ってみる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・助動詞 (Did) の疑問文とその応答 ・一般動詞の過去形(規則変化) ☆Task	<p>過去の疑問文・否定文は動詞のカードを使ったゲームで活動することにより、何度も発音する機会をもたせる。</p> <p>規則動詞の過去形の発音の 3 種類は、それらの違いがはっきりしない可能性もあるので、何度も口頭練習をして、言い慣れる。</p>	テスト		○	○	
	Unit 4 Lesson 9 (9H)	<ul style="list-style-type: none"> ・過去のことに ついての説明 ・順序立てて説明 ・誰がしたかについての情報交換 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般動詞の過去形(不規則変化) ・疑問詞 (Which) の疑問文とその応答 ・疑問詞 (Who) + 一般動詞の疑問文とその応答 ☆Task	<p>後置修飾の文、前置詞のある文などは、日本語とは語順が違うので戸惑う可能性がある。図で例示して視覚でも確認することにより、その語順を理解できるようにする。</p> <p>ペアで 1 分間会話を続ける。ペアを換えてもやってみる。</p>	ワークシート 作文 発表	○	○	○	○
2 月 3 月	Reading for Pleasure [2H]	なくしたボタン	散歩の途中ボタンをなくしたことに気づいたヒキガエルの物語を読む。ヒキガエルはカエルに訴え、一緒に探す、なかなか見つからない。ところが、家に帰るとボタンがあった。ヒキガエルは、カエルにお礼としてボタンのたくさん付いたジャケットを渡す。	初めての物語である。文字を先に見ると、文字の多さに驚くことが危惧されるので、文字を見せる前に、音声と絵で理解させる。それから文字を見せて音読するようにする。また、音読は英文がたくさんあるので、変化をもたせて、ペアで音読をしたり、1 ページ読んだら座るなど、目標をもたせて取り組むようにする。	ワークシート	○		○	

*Reading for Pleasureは、生徒の興味・関心に応じて選択して指導する教材です。必要に応じて活用してください。

第3章 実践授業での様子

第1節 実践授業の成果と課題

研究協力校は、1年生は少人数授業のため、1クラスの人数は19人である。

(1) Unit 1 Lesson 3

学習項目：ある話題（日常生活、趣味など）についての情報交換
指導内容：一般動詞の平叙文、疑問文及び応答、否定文
疑問詞（What）+doの疑問文とその応答
How manyの疑問文とその応答
第1回スピーチ・第2回スピーチ

動作を伴った言語活動を工夫し、活動しながら学べる場面をつくる。音声先行で音読練習を行ったり、動作を伴ったり、ペアで読んだり、変化をつけて取り組む。

前置詞 in, on, at の使い方は図に示して提示することにより、イメージをもたせる。複数形の s の発音は、口頭練習を多くすることにより、発音の違いを意識させ、自分でも発音ができるようにする。

基本文の定着を目指し、ビンゴゲームを取り入れる。第2回スピーチでは、トピックにわけて考える方法を提示する。話したい内容をもてるようにする。

丸枠： 視点①小学校英語活動で身についたことを生かす
太枠： 視点②つまづきに対する支援を事前に準備する
点線枠： 視点③自己表現活動を大切にす

この單元では、一般動詞を使った平叙文、疑問文とその答え方を学ぶ。一般動詞は come, live, like, love, play, have, want の7つである。生徒が live を使って自分の住んでいるところを言えるようにしたり、相手に聞いたりする活動をした。また、インタビューシートを使った活動をした。トランプにヒントを得た活動では、play, like, have を使った疑問文とその答え方の練習をした。How many～を使った表現はALTとTTの授業の機会をもった。夏休みの宿題を使ってのクイズの発表会にも取り組んだ。第1回スピーチを7つの一般動詞を学んでから行い、第2回のスピーチはLesson3終了時に行った。

視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」

liveの導入を、音声先行で授業を進めた。日本地図を使い、都道府県の位置がどこにあるかを英語で質問し、疑問詞whereの意味が理解できるようにしておく。京都府から、京都市→右京区→嵯峨、嵐山、広沢と小学校区まで狭めていった。“Where do you live?”の質問に、“I live in Saga.”と小学校区が言えるようにし、一人ずつ答える。次に、指導者の英語を聞いて、nearの意味を理解させる。そして、今度はnearを使って、自分の表現

ができるようにする。“I live in Hirosawa. I live near the post office.”とそれぞれが違った表現で言えるようにした。

また、小学校英語活動ではチャンツなどリズムに乗って英語を言う活動があったことから、一般動詞を使った英文の定着を目的として、英文をリズムに乗って言う活動をした。クラスを2つのグループにわけ、グループで円になって活動した。“I like soccer.”など、likeを使って英文を作る。そして、みんなで手をたたいてリズムをつけながら、トントン“I like soccer.”トントン“I like soccer. I like volleyball.”トントンと自分より前の人が言った英文も覚えていて言わなければならないようにする。人数が進むにつれて覚える英文が増えてくる。2分間で、何人回ったかを2グループで競う。友達の顔と好きなものを覚えておかなければならないので、集中して活動していた。また、大きな声で言わないと覚えてもらえないので、手拍子に声が消されることのないように、大きな声で言っていた。思ったよりも、音声だけでよく覚えて言えていた。

数字の1～100までの復習をALTとのTTで行った。全体で円になるように立ち、1から数字を言う。初めはそのまま続けて100まで言ってみる。次は、1～19の中のある数字をFizzやBuzzにすると決め、その数字のところでは数字を言わずに、Fizz, Buzzを使う。順番に数字を言って隣の人に回していき、間違ったら座るというゲームである。全員で円になるなど、工夫を加えることにより、単調さはなく、楽しんでいる様子であった。

本文の音読練習では、はじめは文字を見ないで、音声だけで行った。生徒たちは、かなり長い英文を文字を見ずにリピートできる。“You come here on Wednesday, too, right?”という長い英文を音声だけの練習で覚えることができた。しかし、英文の意味をわかって言っているのではなく、音とリズムで覚えているので、はじめの単語が思い浮かばないと、全く思い出せない生徒もいた。

doを使った疑問文については、トランプにヒントを得てカードを使った活動を考えた。1グループ3人から4人にわける。それぞれが対戦できるように机を合わせる。「動物」「教科」「スポーツ」の3種類のカテゴリーのカードがそれぞれ20枚ずつある。各チームの中で、一人が5枚ずつ選ぶ。相手のチームに見せないように持ち、順番に“Do you like music?”と自分が持っているカードを相手のチームに聞く。聞かれた人は持っていたら、“Yes, I

do.”と言ってカードを渡す。もっていなければ“No, I don't.”と言う。トランプのババ抜きと同様に、相手からたくさんのカードを取ったほうが勝ちとする。動物のカードには動詞はhaveを使い、教科のカードにはlikeを、スポーツのカードにはplayを使うことにした。

ビンゴゲームを生かしたオリジナル教材を製作した。小学校英語活動で行っていたカードを使った活動と、自己表現を支え、基本文の音声での定着を目指した活動を合わせたものである。Unit1で学ぶ、基本文と自己表現活動に使える英文をピックアップし、カードの表にはその英文の表す絵とキーワードを印刷しておき、カードの裏には英文を書いておく。たとえば、表には兄弟の絵とキーワードのbrothersが描いてあり、裏には“I have two brothers.”と書いてある。生徒は一人16枚のカードをもっており、机の上に縦、横4枚ずつばらばらに並べる。キーワードと英文を指導者の発音をリピートしながら、カードを見つけてひっくりかえしていく。12枚のカードが読まれる。そこで、縦、横、ななめにビンゴになった数を競う。という簡単なゲームである。これを毎時間行うことからビンゴの数の合計を書く表に自分のビンゴの数を数え、毎時間集計していく。多くの生徒はこのカードのゲームに喜んで取り組んでいた。Unit1のビンゴは12回活動した。そのなかで、8回目に世界地図



写真 3-1 教材で活動する

に○印をたどっていくと世界一周旅行ができるものを使い、その○印にビンゴの数だけ色を塗っていくことに

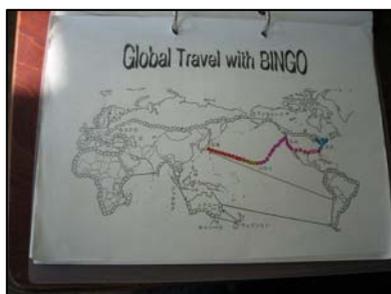


写真 3-2 世界地図シート

した。世界地図を使った初めの日には、世界の各都市の話をする中で、生徒は、ビンゴの数を塗ってどこまで旅ができるかという目標ができ、ビンゴの活動と共にこの世界旅行も楽しみのひとつになったようである。毎回の授業で世界地図に色を塗り忘れる生徒はいなかった。表3-1にいくつかのビンゴの英文を紹介する。

表3-1 Unit1 ビンゴゲームで使う英文例
(下線部はキーワード)

1. Baseball is an exciting sport.
2. I'm in the computer club.
3. I play soccer. It's fun.
4. I swim on Wednesday.
5. I play the piano.
6. I want a dog.

夏休みの課題の発表を行った。夏休みの課題は“What am I?” または、“Who am I?” のクイズを作ることであった。画用紙に絵と共に英文を描いてくる。授業ではそのクイズの発表をした。生徒の中には、辞書などで調べて、習っていない表現や語句を使った生徒もいた。しかし、発表をする中で、そのような表現を使っても、クラスのみんなに理解してもらえないものもあり、そうすると、自分のクイズにも答えてもらえないと感じたようであった。

視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」

本文の内容理解では、前置詞 in, on, at が次々に出てくるが、これについては、図を用いてイメージをもたせておくようにした。

生徒の中にはin とnearを同時に使ってしまうというつまずきが予想されたため、口頭練習の後、視覚での確認をした。

doを使った疑問文とbe動詞を使った疑問文の違いについては、時間をとって説明をした。

単語を覚える機会をつくるため、月の名前の単語テストを行った。

視点③「自己表現活動を大切にする」

liveを使った英文の基本練習のあと、次のようなペアでのインタビューの会話をした。自分だけの英語表現は視点③を意識して行った。

- | |
|-------------------------------------------------------------|
| S1: I live in Saga. And you? |
| S2: I live in Arashiyama.
I live near Togetsukyo Bridge. |
| S1: Oh, I see. |

このインタビュー活動は自分のクラスの友達を知る

きっかけにもなった。普段は話さない人とも、インタビュー活動を通して、話す機会をもつというのは、クラス作りにも役に立つと思われる。

また、一般動詞を使ったインタビュー活動では、Do you～を使った3つの英文を自分で考え、ペアになってお互いにインタビューをしたり、クラスの友達にインタビューをしたりした。

授業の始めの時間を使い、教師の英語での質問に答える活動も毎時間継続して行った。ビンゴの

ゲームには主に肯定文を用いているため、疑問文に対する答え方は、このようなQ&A活動でスパイラルに取り組むことにより、定着を目指した。



写真 3-3 Q&A 活動

名詞の複数形と“*How many ~?*”を使った疑問文とその答え方の学習は、ALTとのTTで行った。“*How many ~?*”については、毎時間のビンゴゲームのあとに“*How many Bingos do you have?*”と聞いているので、意味についてはよく理解していた。導入のあと、4人のグループになり、話し合ってALTに質問をする。質問に行く人は代わりあっていくことにした。グループでポイント制にすることにより活発に活動ができた。活動にゲームを取り入れるときには、「勝ち負けがあること」「協力させること」の要素があると活発な活動ができると考える。ALTに質問をして、答えてもらった時には、何も指示をしていなかったが、生徒からは“*Thank you.*”という言葉が自然に発話されていた。これらのALTへの質問の一部を紹介する。グループで考えたため、多数の質問が考えられた。語彙が限られているため、質問のなかには違和感のある英文もある。このような活動では、生徒は小学校英語活動で扱っていた単語を使う姿が見られた。

- *How many houses do you want?*
- *How many watches do you have?*
- *How many fruits do you like?*
- *How many animals do you like?*
- *How many CDs do you have?*
- *How many brothers do you have?*
- *How many sport players do you like?*

(2) Unit 2 Lesson 4 と Word & Word 3

学習項目：時刻について
知らない人についての質問や情報交換
指示や注意を促す
指導内容：What time ~ ?
What time do you ~ ?
疑問詞 (Who) の疑問文とその応答
命令文の表現

命令文や月の名前の学習に動作を伴った活動を取り入れる。

音声では理解できるが、英文を正しく書けない生徒もいるので、授業で、ディクテーションを取り入れ、自分がどんな単語が書けないかを自分で確認できるようにする。書けない文は何度か授業の中で書く指導をする。

私の1日の生活を発表する。その発表に関する質問をするなどし、全体で聞き取る機会をもち、相手を見て受容的に聞くことができるようにする。

この単元では生徒たちは時刻の聞き方、答え方を学ぶ。また、“*What time do you ~?*” で始まる疑問文やその答え方、疑問詞Whoを使った疑問文とその答え方、命令文を学ぶ。教科書の本文には、*he, she*という主格の人称代名詞と共に、目的格の人称代名詞*him*も出てくる。また、Word & Word 3では、一日の生活を扱っている。

視点①「小学校英語活動で身につけたことを生かす」

時刻の聞き方、答え方では、音声先行での授業を進めた。前の単元では、ALTとのTTで数字の復習をしていたので、理解が早かった。時計を使い、何度も口頭練習を行い、一人ずつ答えられるように練習を重ねた。

命令文の学習の時間はALTとのTTであったので、小学校英語活動でも取り込まれている、ALTの言う動作をするという活動をした。ALTが*please*をつけて英文を言ったときにだけその動作をするというものである。その後、自分たちで命令文を3種類作り、発表をした。

ユニットが新しくなったので、新しいビンゴゲームで活動を始めた。Unit2のビンゴのゲームで使う英文の一部を表3-2に紹介する。Unit1に比べ、英文が長くなり、その英文の表現も、授業がUnit2に入った時期にはほとんどが予習となるため、生徒には難しく感じられたようだが、ビンゴの活動自体を好んでいることから、意欲を失うことなく活動していた。

表3-2 Unit 2 のビンゴのゲームで使う英文の一部
(下線部はキーワード)

1. What time do you get home? At 5:20.
2. Be quiet, please.
3. After dinner I usually do my homework.
4. Does Jun live in America? Yes, he does.
5. Hamburgers are my favorite food.

視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」

生徒には正確に書くことに対する課題があることが期末テストの結果から感じられたので、授業でも「書く」指導を入れることにした。毎時間継続して、Unit1のビンゴゲームから言い慣れた英文を3文選び、ディクテーションをした。自分がどの単語が書けて、どの単語が書けないのかを生徒自身が認識することができ、書けない英文はその時間に練習をしたので、正確に書くことへの意識を高めることができた。

時刻の答え方では、1時から11時については、反射的に答えられるが、12時の*twelve*を*twenty*と間

違う生徒の姿が見られた。数字の練習ではこの2つについては、意識して口頭練習に取り入れる必要性を感じた。

単語を正しく書けないというつまずきが予想されるため、授業で単語テストに取り組むことにした。単語テストに生徒が取り組みやすくするため、1回のテストにつきテスト範囲は1ページにすることにして、継続して取り組んだ。

人称代名詞のheとsheは生徒たちにとって理解しやすい。しかし、heとhimについては使い方が理解できないというつまずきが予想されるため、英文の中で確認をした。代名詞については、継続して指導していく必要があると思われる。

視点③「自己表現活動を大切にする」

1日の生活を英語表現する学習では、いくつかの表現はビンゴゲームで扱っているため、生徒にとってはなじみがある。教科書に沿って11文で自分の生活をノートに書かせてみた。そして、次の時間から、3人～4人ずつ、授業の始めの時間を使い、発表した。発表者が前に立つと、残りの生徒が立つ、発表者の一日の生活を聞き、それに対しての指導者から出される質問にわかたら答える。答えたら座るという活動をした。生徒はメモをとらずに、発表者の英語に耳を傾けた。1時間目には聞き取るポイントがわからなかった生徒も、2時間目からは時刻を正確に聞き取ることがだんだんできるようになった。指導者からの質問の一部を紹介する。

What time does he (she) get home?
[He(She) gets home] at 6:20.
What time does he (she) go to bed?
[He(She) goes to bed] at eleven.

最初の1～2時間目は、生徒の答えは、“At 6:20.”を求めた。しかし、何人かの発表と共に授業も進み、3単現のsを習う頃には、生徒には文で答えることを求めた。この発表では、生徒が数字に気をつけて聞き取ることに、発表者は、クラスみんなが聞き取れる声の大きさや、明瞭さが必要であると気付く機会になった。また、does という単語を何度も聞くことにより、その後の授業での導入が容易になったと考えられる。

(3) Unit 2 Lesson 5 と Useful Expressions 1

学習項目：その場にはいない人についての質問や説明
予定や場所の情報交換

指導内容：助動詞 (Does) の疑問文とその応答
三人称単数現在形を含む文
疑問詞 (When, Where) の疑問文とその応答
第3回スピーチ

生徒に誕生日はいつかを聞いたり、どこに住んでいるのかを聞いたりして、音声を先行させて授業を進める。

三単現のsについては動詞の原形のまま使ってしまう可能性があるため、何度も口頭練習をする。また、自分の友達や家族について表現する活動を取り入れ、使い慣れることにより、正しい英文が言えるようにする。

第3回スピーチでは、友達や家族のことも含めての自己紹介をする。第2回スピーチよりも深い内容になるようにスピーチ例を提示し、表現の仕方を紹介する。

この単元では、doesを使った疑問文とその応答や否定文、三人称を主語にした表現を学ぶ。また、疑問詞When, Whereを使った疑問文やその答え方を学ぶ。前単元では、生徒が行う1日の生活の発表や、ビンゴゲームに、does やdoesn'tがふんだんに取り入れられているため、生徒にとって、新しいことを学ぶという意識は薄い。2つの疑問詞についてもすでに、Q&A活動の中や、授業中に使っているため、意味は理解している。

視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」

三単現のsについての指導は、自分の好きな食べ物を一人ずつ発表した。第2回のスピーチで好きな食べ物を紹介している生徒もあり、このような話題で和やかに授業が始められた。その後、指導者の好きな食べ物を当てさせることにした。

Mr. Mihara likes Mattake.

Mr. Mihara likes meat.

このように、一人ずつ当てていく。なかなか当たらないので何度もlikesと言いつつ、また、友達が発音するlikesを聞くことになる。何回か回って、答えが当たったところで、文法の説明をした。

疑問詞、When, Where を使った表現を学ぶ授業では、誕生日はいつかを聞く、またどこに住んでいるのかを英語で聞いた。この疑問詞については今までにも授業の始めのQ&Aやビンゴの活動でも取り入れていたこともあり、理解はできていた。誕生日を答える生徒の表情は晴れやかであった。

視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」

he, himの使い分けが、前単元で扱われていた。代名詞の使い分けに戸惑う生徒は多い。日本語では、代名詞を使う回数が英語より少ないからである。英語の代名詞はすぐに使えるようになるのは難しい。それは、使っていく中で身につけていくものであるから、継続した指導が望まれる。次のスピーチで代名詞を使う可能性が高いので、教科書のp. 111に載っている代名詞表を先に教えるこ

とにした。リズムよく音読し、書くことまで求めることにし、単語テストも行った。

様々な文法事項を学んでいるので、時々、それを頭の中で整理する機会が必要である。ここでは、答えの英文を見て、質問文を考える問題を全体で行ったり、3単現のsと複数形のsを同じ文の中で確認したりした。

視点③「自己表現活動を大切にす

ハンバーガーショップへ行こうと誘う表現と、ハンバーガーショップでの注文の表現を学ぶ。ここでは、ALTとのTTで授業を行った。「誘う表現」「注文の表現」に分けて学習をした。「誘う表現」ではペアを作り、音読練習をし、発表をする。次に、ペアで相談して、どの食べ物屋さんに行くかを換えて練習し、発表をした。それぞれのペアが選ぶ食べ物さんに生徒たちは興味をもって発表を聞いていた。「注文の表現」も同じようにして活動した。

第2節 スピーチにおける成果

(1) 第1回スピーチの様子

「第1回スピーチにいくつかの一般動詞を使つての表現も入れたい」との1年生の英語科教員の思いから、教科書のLesson3で学ぶ一般動詞を先に導入しておき、スピーチに使えるようにした。導入する一般動詞は、come, live, like, love, play, have, wantの7つである。小学校英語活動でもよく使われる基本的な動詞で、liveについては導入済みであったので、混乱なく理解できた様子であった。7つの動詞を使い、自分の名前とニックネームとともに、自己紹介を書いてみた。それぞれだいたい10文程度の自己紹介を書くことができた。そして、ペアワークで友達に聞いてもらう活動をしたあとで、クラスの前に出て、自己紹介のスピーチをした。

授業で、名前と愛称のみの自己紹介や、その動物になりきっての自己紹介など、発表の機会を多くもっていたので、生徒は発表も緊張しながらではあるが楽しみ、クラスの生徒の発表も興味をもって聞く姿が見られた。発表をするのに、恥ずかしがったり、いやがったりすることがほとんどなくスムーズに発表することができた。このスピーチを色画用紙に描き、掲示物として、学習室に貼り、他クラスの生徒の作品も見ることができるようになっている。

5人の生徒のスピーチを紹介する。

A君の第1回スピーチ

Hello, everyone.
My name is A. Please call me A.
I like swimming. I love dogs. I swim.
I have a dog. My favorite dog is a poodle.
I want a goggle. Nice to meet you.
Thank you. (11文)

B君の第1回スピーチ

Hello, everyone.
My name is B. Please call me B.
I love soccer. I want an MD. I have a TV.
I play soccer. Nice to meet you.
Thank you. (9文)

Cさんの第1回スピーチ

Hello, everyone.
My name is C. Please call me C.
I like Disney. I love the Pooh.
My favorite song is "Konayuki" by Remioromen.
Nice to meet you. Thank you. (8文)

Dさんの第1回スピーチ

Hello.
My name is D. Please call me D.
I like dogs. I love cats. I want a cat.
I play tennis. I want a new racket.
I live in Saga. I'm from Saga.
Nice to meet you. Thank you. (12文)

Eさんの第1回スピーチ

Hello, everyone.
My name is E. Please call me E.
I love a dog. I like a clarinet, too.
I have a dog. I play the clarinet.
I don't have a clarinet. I want my clarinet.
Nice to meet you. Thank you. (11文)

このように、生徒は初めてのスピーチは自分の言いたいことや、言えることを探してスピーチにした。ただ、「内容が繋がった自己紹介」という説明をしたが、つながりまでは自分たちの力で、意識できなかったと思われる。

(2) 第2回スピーチの様子

第2回スピーチを10月に行った。一般動詞の数は、第1回スピーチとほとんど変わらない。今回は、やや構造的に、筋道立てた言い方でスピーチが行えるようにスピーチの型(話型)を提示し、トピックにわけて考えるように指導した。また、

treasureという単語は未習であるが、自分を語るためには必要な語と考え指導した。トピックにわけて話すことにより、筋道立てた言い方ができ、相手にもわかりやすくなる、と生徒に説明をした。そして、スピーチ例を示し、生徒は自分ならどんなことが言えるかを考えて、原稿を作った。その結果、20文程度の自己紹介が作れた。その原稿を指導者とALTでチェックして、難しい表現で書こうとしているときには簡単な表現にできるとアドバイスするなど、個別指導をした。提示した話型を表3-3に記す。

スピーチの前の時間にはスピーチのモデルを指導者が示し、

「相手に語りかけるように」スピーチをすることを指導した。

また、スピーチの感想を何人かの生徒に聞いた。スピーチの発表を通して自己との対話を深めるため、スピーチごとに、あらかじめ決めておいた生徒が質問をしたりした。発表者が質問に答えることにより、より自己と向き合える機会をもった。質問は、まだ語彙数や使える文型が限られているため、英語で表現できない質問は日本語でも

表 3-3 提示したスピーチの型（話型）

Hello. My name is ~. Please call me ~.
 I have two (three) topics.
 The first topic is about~
 ・
 ・
 The second topic is about~
 ・
 ・
 Thank you.

よいこととした。発表者は、質問がしやすいように、大きな声で、ハッキリ発音をするようになっていった。表3-4にスピーチ例の一部を示す。

スピーチは、3時間にわけて行った。日をわけて行うことで、先にスピーチをした友達を見て学び、自分のスピーチに友達が使った表現を生かす姿も見られた。

A君の第2回スピーチ

Hello. I'm A. Please call me A.

I have two topics.

The first topic is about my favorites.

・ I like gymnastics. Do you like gymnastics?

I do on Saturday.

・ I love animals. I love dogs. I have a dog.

The dog is cute.

The second topic is about my treasure.

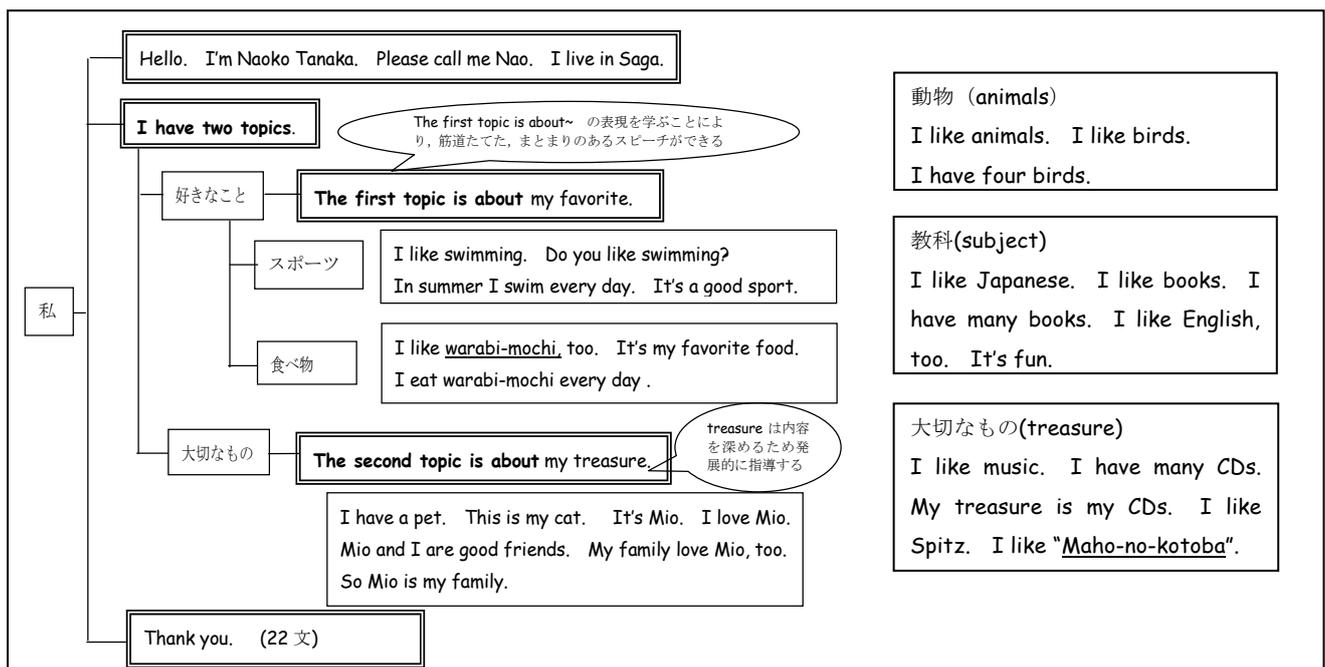
I have a dog. It's my pet. I love pets.

It's my family. Peace is very cute.

Thank you. (19文)

質問 「犬の名前は何ですか。」
 「ピースです。平和という意味です。」
 「犬の種類は何ですか。」
 「トイプードルです。」

表 3-4 スピーチ例の一部



B君の第2回スピーチ

Hello. I'm B. Please call me B.
I have three topics.
The first topic is about badminton.
I like badminton. I play badminton. I want a new racket and new shoes. My racket color is red. The new racket color is white.
The second topic is about soccer.
I love soccer. Do you like soccer? I have shoes. Soccer is an exciting sport.
The third topic is about music.
I love music. My favorite singer is Remioromen. I want an MD player. I have a CD player.
Thank you. (21文)
質問 「レミオロメンで好きな歌は何ですか。」
「粉雪です。」
「靴は何足持っていますか。」
「1足です。」

Cさんの第2回スピーチ

Hello. I'm C. Please call me C.
I have three topics.
The first topic is about my favorites.
• I like volleyball. I have a volleyball.
I play volleyball all year around.
• I like PORNO GRAFFITI. I like Aporo.
I have CDs.
The second topic is about my treasure.
I have DVDs. They're my birthday presents. They are "Sekai-no-chushin-de-ai-o-sakebu" and "1 rittoru-no-namida". I'm happy.
The third topic is about my family.
I have two sisters. My sisters are twenty-four and twenty-three. My sisters like karaoke. My sisters and I love songs. My favorite singers are Ai Otsuka and PORNO GRAFFITI.
Thank you. (22文)
質問 「バレーボールのどこが好きですか」
「みんなで、パスをしあったりするのが楽しいです。」
“How many CDs do you have?”
“ I have about five CDs.”

Dさんの第2回スピーチ

Hello. I'm D. Please call me D.
I have two topics.
The first topic is about my favorites.
• I like tennis. Do you like tennis? I play tennis every day. It's a good sport.
• I love cats very much. It is very cute.
The second topic is about something to want.
• I want a cat or a dog. I want to enjoy with my pets.
• I want my room. Now we use one room together. So I want my room.
Thank you. (18文)
質問 「テニスはシングルかダブルスかどっちですか」
「ダブルスです。」
“How many dogs do you want?”
“ One dog.”

Eさんの第2回スピーチ

Hello. I'm E. Please call me E.
I have two topics.
The first topic is about my favorites.
• I like animals. I love dogs. How about you? I have a Shibaken. It is a white dog. It's Haku. Haku is my good friend.
• I like fall, too. It's cool.
My birthday is October 30th.
The second topic is about my house.
I live in Kobuchi-cho. I live near Saga junior high school. It has many trees.
Thank you. (20文)
質問 「ハクは何歳のときに飼いましたか。」
「10年前です。2月が誕生日です。」
「どんな動物が好きですか。」
「だいたい動物が好きですが、ヘビとかはあまり好きではありません。」

話型を提示することで、トピックにわけて考えるので、一つ一つがまとまりのある、やや構造的な文になり、聞き手にも聞きやすくなった。また、スピーチのあとに質問を受け付けることにより、自分を振り返り、自分の内面と対話しながら答える姿が見られた。特に、「なぜ、好きなのですか」と理由を聞かれたときには、普段そのようなことを考えていないのか、ずいぶん考えて答えていた。

このように、スピーチは普段あまり考えないことも考える機会となる。そしてそれは自分について、深く考える機会となる。十代のこの時期にこそ、このような機会をもちたいと思う。

第2回のスピーチのあと、アンケートをとり、今回のスピーチをどのように感じているかを聞いてみた。「第1回のスピーチに比べてどんなふうに感じていますか。」という質問に生徒は次のように答えていた。一部を紹介する。

- ・しゃべれる量が増えて、詳しくスピーチできるようになった。
- ・分かっている単語が増えて、書ける量も増えたと思う。だから、自分が思うとおりに伝えたいことも今回は書けたと思う。
- ・今回のスピーチの方が難しかったし、やりがいがあった。
- ・6月と違い、知っている単語が増えたので、スピーチを書くことがだいぶ楽だったし、人のスピーチもだいたい意味が理解できた。
- ・自然と思った文章が出てきて書けるようになった。前より英語でなるほどと思うことが多くなった。
- ・前のスピーチは文が切れているのが多かったが、今回は文どうしがつながって、前よりもいいスピーチだったと思う。

また、スピーチ原稿を書くときに役に立ったと思うものを記述式で聞いてみた。表3-5にその一部を示す。

表3-5 「今回のスピーチ原稿を書くときに役に立ったと思うことを3つ挙げてください。」
対象：1年生 人数：55人 時期：10月中旬
複数回答可

ビンゴ	37人	67%
ノートに予習する	16人	29%
単語を覚えること	15人	27%
ディクテーション	14人	25%
教科書の音読	13人	24%

上位4つのほかには、教科書準拠のCDを聞く、授業始めのQ&A、授業、単語テストや定期テスト、スピーチ例のプリント、辞書などと答えていた。

友達のスピーチを聞いて、役に立てたいと思うことや、内容でよかったと思うことは何かについて聞いてみた。生徒の回答の一部を紹介する。

- ・家族の年齢、好きなスポーツをいつ頃からやっているなど、詳しく分かって、聞くのもワクワクした。
- ・文と文がしっかりつながっていたから今度のスピーチで単語とか文をしっかり考えていきたい。
- ・一つのことをかなり詳しく説明している人がいたから、自分ももう少し詳しく説明したいと思った。
- ・内容がばらばらではなく、ひとまとまりだったのがよかった。例えば、教科が好きだったら、何が好き

で、なんで好きなのかを詳しく言っている人がいてよかった。

次のスピーチに向けて、どんなことを英語で言ってみたいかを聞いてみた。生徒の声の一部を紹介する。

- ・サッカーに関するいろいろなこと
- ・これから習う英語を使いたい
- ・平日に何をしているとか、将来の夢を英語で言ってみたい
- ・部活とか、友達のことを言ってみたい
- ・自分の家族のことや、学校のことを言ってみたい
- ・自分の家族についてもっと詳しくしたい
- ・自分のお気に入りのものを紹介する
- ・自分の大切なものに出会ったきっかけ
- ・自分の家族のこと、つりのこと、好きなこと

自分に関することをより詳しく、英語で言ってみたいと思っていることがうかがえる。発表を授業で取り入れ、スピーチを複数回することで、スピーチに対する意識も高まっていると考える。

(3) 第3回スピーチの様子

第3回のスピーチは12月に行った。このスピーチでは、自分のことと共に第三者のことが英語で表現できるようになっている。今回はスピーチの目的に触れた。5月のアンケートでみんなが望んでいたのは「英語を話したり書いたりしたい」ということであったが、それにはスピーチがよい方法であること。前回のスピーチより使える表現が増えていることから、言いたいことがもっと言えるようになっていくことを告げ、今回の目標を設定した。

スピーチをしよう

1. 相手にわかるスピーチにしよう。
2. 1つのことを深く言ってみよう。
(because, so という単語を使ってみよう)

1については、相手も知っている単語や表現を使うこと。どうしても使いたい単語がある場合は、meanを使ってその単語を説明すること。例えば、I like gymnastics. Gymnastics means taiso. など具体的な例を示した。

2については、接続詞を2つ (because, so) 教えて、理由も言えるようにすることにより、より内容的に深いものを目指した。前回のスピーチで、発表者への質問で「なぜ、野球が好きなんですか。」「なぜ、バレーボールがおもしろいのですか。」という質問が出たことに触れ、聞いている人の知りたいことはこのようなことなので、理由を言って

みようと提案した。その際、前回のスピーチを取り上げ、具体的に、このように言えばよいということ指導した。

前回のスピーチで、「なぜ、バレーボールが好きなのですか。」という質問に、「ボールを打って、ラリーが続くとおもしろいし、見ていても面白いと思うからです。」と答えていました。これは、英語ではこう考えます。「ボールを打って、ラリーが続く」というのは、英語ではまだ言えないので、「練習をチームのみんなとする」と考えます。するとこんなふうに英語で言えます。

I like volleyball. Because I like volleyball practice with my teammates. I like watching volleyball, too. It's fun.

英語の文を書く時には、普通becauseという接続詞は文頭には置かないが、スピーチをするときには、英文はつながるので、問題はないと考えた。そのため、スピーチを原稿にすると、英語としては少し違和感が残るものになる。

スピーチの原稿を作るために、スピーチ例を示し、約30文程度の英文を書くこととした。表3-6にスピーチ例の一部を示す。スピーチ例のプリントを示したとき、あまりの英文の多さに生徒は驚いていた様子であったが、がんばって挑戦しようとする姿があった。

第3者のことが表現できることと、代名詞が使える

ことで、ずいぶん英語らしいスピーチが作れることになる。生徒が書いた原稿は、語順のミスはほとんどなくなったが、代名詞の使い方があいまいであった。しかし、代名詞については、このような機会をとらえて、個別に指導していくのが有効と考える。

個別に生徒の原稿を指導する場面では、教科担任からの指導を待ち望んでいる様子が見られた。また、このときに、教科担任は個別につまずきへの支援を行うことができた。今回の原稿では、辞書からそのまま抜いてきたような難しい英文を生徒が書いてくることはなかった。そこで、何人かの生徒に、どのようにして原稿を考えかを聞いてみた。生徒は、「日本語で考えると、ややこしいので、英語で考えて書いた」「英語の文から自分にあてはめて換えて書いた」と答えていた。日本語で考えてそれを英語に訳したのではなく、英語から考えたことがうかがえた。

スピーチは、原稿を読むのではなく、語りかけるように伝えることを告げ、原稿から簡単なキーワードを書いたメモを作り、スピーチの時にはメモを手元に置いてよいこととした。



写真 3-4 スピーチの説明をする

1. 相手にわかる
2. 1つのことを深く
so, because を使おう

表 3-6 第 3 回スピーチ例の一部

Hello. My name is Osamu Inoue. Please call me Osamu.

I have two topics.

The first topic is about my family.

About my sister I have a sister. Her name is Hitomi. She goes to elementary school.

She is ten. She likes music. She plays the piano.

About my pet I have a pet. His name is Shiro. He is a white dog. He is three years old. Shiro is very friendly.

So my sister and I love Shiro.

The second topic is about my favorite singer.

My favorite singer is Ken Hirai. He is a good singer. I like his voice. Because his voice is beautiful.

I always listen to his songs. I like Hitomi-o-tojite.

Thank you. (27文)

*friendly (人なつっこい)

my friend

I have a good friend. His name is Kenta. He and I are on the soccer team. We play soccer every day. We have a game next Saturday. He has a dog, too. His dog's name is Koro. He likes dogs. But he doesn't like cats.

A君の第3回スピーチ

Hello. I'm A. Please call me A.
I have three topics.
The first topic is about my pet.
• I have a pet. His name is Peace. I like him very much. I always walk with him. He eats dog food after a walk. He likes running. He usually barks. His hair is gray.
The second topic is about my friend.
• I have a good friend. His name is M. He lives in Saga. He loves music. He loves Arigato. He is very kind.
The third topic is about my daily life.
• I get up at 6:30. I eat a rice cake and cocoa for breakfast every day. A rice cake means omochi. After school I swim. I like gymnastics. Gymnastics means taiso. I take a bath at 9:00. I go to bed at about 10:00.
Thank you. (30 文)

B君の第3回スピーチ

Hello. I'm B. Please call me B.
I have three topics.
The first topic is about my brother.
• His name is M. He likes badminton. M's treasure is his racket. He is a good badminton player.
The second topic is about my favorites.
• I like music. Do you like music? My favorite group is SMAP. My favorite song is Arigato.
• I like Shingo Katori. Because he's interesting. He likes mayonnaise. He is a good singer.
The third topic is about my friend.
• I have a good friend. His name is N. He swims. He lives in Sagano. He likes dogs. His dog's name is Moko. N is my good friend.
Thank you. (27 文)

スピーチの時間には、友達のスーピーチを集中して聞くことができた。スピーチのあとでの指導者からの内容に関する質問には、進んで答える姿があった。また、スピーチを終わった生徒も、自分のスピーチが伝わっていると、ほっとした様子であった。

Cさんの第3回スピーチ

Hello. I'm C. Please call me C.
I have two topics.
The first topic is about my sisters.
• I have two sisters. Their names are M and N.
• M is twenty-five. She is a nurse. Nurse means Kangoshi.
• N is twenty-three. She likes music. She likes Hamasaki Ayumi. Because she is so cute.
The second topic is about music.
• I like music. I'm in the school band. I play the euphonium. It has warm heart sounds. Warm heart means atatakai-kimochi. And it has really soft sounds. Soft sounds mean yasashii-oto. So I like euphonium.
• My favorite song is PIRATES OF THE CARIBBEAN. Because it is powerful.
Thank you. (26 文)

Dさんの第3回スピーチ

Hello. I'm D. Please call me D.
I have three topics.
The first topic is about my sister.
• I have a sister. Her name is M. She goes to elementary school. She is eleven. She plays basketball. She likes basketball. Because basketball is an exciting sport.
The second topic is about my brother.
• I have a brother. His name is N. He goes to high school. He is sixteen. He plays volleyball every day.
The third topic is about my favorites.
• Do you like peaches? They are very nice. So I like them.
• I love cats. Because cats are very cute! But I don't have a cat. So I want a cat.
Thank you. (27 文)

それぞれが、聞く人のことを考えて、習った語句を使い、習っていない語には説明を付け加える姿がある。また、前のスピーチで同じトピックで書いている生徒も、前回よりもより詳しく、より深く説明しようと努力している姿があった。

Eさんの第3回スピーチ

Hello. I'm E. Please call me E.

I have two topics.

The first topic is about my brother.

- I have a brother. His name is M. He is ten and he is a Saga elementary school student. Elementary means Shogakko.
- He plays soccer. His favorite player is Shunsuke Nakamura. Because he is a good player.
- He plays tennis, too. He likes tennis. Because it's an exciting sport. I like tennis, too. How about you?

The second topic is about my favorites.

- I love clarinets. I have a clarinet. It's a good musical instrument. Musical instrument means gakki. Because it has a beautiful sound. I play the clarinet every day. I play "In the mood," "Arigato", "Ihi-tabi-dachi" now.
- I like books. I love "Yokai Apatto no Yukaina Nichijo" series. I have some of them. It's an exciting story. Do you have any good books?

Thank you. (31文)

第1回スピーチから第3回スピーチを比較してみると、生徒が授業で学習している表現を使いながら、ひとつのトピックをより詳しく書こうとしているのがわかる。

(4) 生徒の変容

次に、生徒の変容について、英語は苦手であると思っているFさんのスピーチの変化を見る。

Fさんの第1回スピーチ

Hello.
My name is F. Please call me F.
I live in Arashiyama. I want my room.
I have two brothers. I love my family.
Nice to meet you. (8文)

Fさんの第2回スピーチ

Hello. I'm F. Please call me F.

I have three topics.

The first topic is about my house.

- I live in Arashiyama.
I live near Arisugawa-River.
- I have two brothers. I have five members in my family.

The second topic is about my animals.

- I like hamsters. I don't have any pets.
I want pets.

The third topic is about color.

- My favorite color is pink. I have some pink goods. My lucky color is pink.

Thank you. (18文)

質問 「ハムスターのほかに好きな動物は何ですか。」
「I like dogs and cats.」
「ピンクのどこが好きですか。」
「ピンクはかわいらしいし、恋の色だからです。」

Fさんの第3回スピーチ

Hello. I'm F. Please call me F.

I have three topics.

The first topic is about my family.

- I have five members in my family.
I have two brothers.

They are M and N.

M is eleven. So he goes to elementary school.
Elementary school means Shogakko.

N is four.

The second topic is about animals.

- I like pets. So I want dogs and cats. Because dogs and cats are very cute! Do you like dogs or cats?

The third topic is about my school band.

- I'm in the school band. I play the sax after school every day. The sax is very great. Do you like music? I like music.

Thank you. (24文)

第1回スピーチでは7つの動詞のうち4つを使つての自己紹介であった。

第2回スピーチでは、授業でも取り組み、ビンゴゲームでも繰り返し使つた表現である、nearを使つての表現を付け足すことができた。“I don't have any pets.”の表現はビンゴゲームで使つていた表現である。

第3回スピーチでは、家族の紹介の内容がより具体的になり、スピーチ例を参考にしたと思われる。動物についてのトピックでは、前回のスピーチの内容に今回の目標である、so, becauseを使つた表現を足すという挑戦をしている姿がある。また、エクスクラメーション・マークを使つたり、質問を投げかけたりと、文章に表情が感じられる。

この生徒の第3回スピーチを終えてのアンケートでは、スピーチの原稿を書くときに役に立ったものとして、「ビンゴゲーム」「単語を覚えていた

こと」「前回のスピーチ原稿」が挙げられていた。英語が苦手であると思われる生徒であるが、ビンゴゲームに親しみ、少しずつ単語を覚えることで、基本文を自分の中に定着させている姿が見られる。

第3回スピーチを終えて、生徒の感想の一部を紹介する。

- ・前のスピーチより自分のことがさらに詳しくみんなに伝えられたと思います。自分のことを英語で話すのは楽しいなと思いました。
- ・今回のスピーチでは、文を長くしたが、becauseとsoを使えば、案外簡単だった。しかもスピーチしてみると、なぜか自分が難しい英語を使っているように思えました。
- ・スピーチをした後に、自分が何を間違えたかわかるようになった。
- ・人のスピーチが前よりわかるようになった。
- ・聞いている人にわかりやすい単語を使って、とても表現力がついたと思います。前回やったときは、「緊張した～」だったけど、今回は「やった！」と達成感でいっぱいでした。
- ・内容がより濃くなって、簡単な英語で様々なことを表現することができるんだとあらためて感じた。
- ・英文を作るのが面白くなった。
- ・友達の発表では、何と言っているのかを理解しようという気持ちがでてきた。

スピーチをしたあとにアンケートをとった、「スピーチをし、スピーチを聞くことで自分の中でどんな変化がありましたか」という質問に、4つの選択肢（とてもそう思う・まあそう思う・あまりそう思わない・ほとんどそう思わない）で回答を求めた。その結果を表3-7に記す。

表3-7「スピーチをし、スピーチを聞くことで自分の中でどんな変化がありましたか」
対象：1年生 時期：12月中旬 人数：94人

「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えた生徒の比率

1. 自分の思っていることを英語で言えるようになった	(37.2%+50.0%)	→ 87.2%
2. クラスの友達のことに関心をもてた	(27.7%+54.3%)	→ 82.0%
3. 英語に興味をもった	(57.4%+35.1%)	→ 92.5%
4. 友達が話す英語のスピーチに興味をもって聞けた	(50.0%+42.6%)	→ 92.6%
5. もっと英語が話してみたくなった	(48.9%+31.9%)	→ 80.8%

全体の生徒が、指導者が用意したいわば、「やや構造的なスピーチ」というハードルを意欲的に跳んでいるという姿がある。日々の授業で、新しく習った表現を使って自分のことを表現させるという活動があり、英語で自分のことを表現することは子どもたちにとってできそうなことであった。それで、英語で話すことに興味をもち、英語で話す友達スピーチに耳を傾け、「もっと英語が話してみたい」と思ったと考えられる。この「もっと英語で話してみたい」という姿は、小学校英語活動で育てたい子どもの姿そのものであり、中学校の英語学習で育てたい姿でもある。少し高めハードルではあった。しかし、このハードルは「知っている単語や文型を使って、幼い表現ではなく中学生の使う表現を使う」という、クールで、努力をすれば越えられそうなハードルであった。このことが生徒を、意欲的に挑戦しようという気持ちにさせたのではないだろうか。

スピーチを3回取り組んだ後の指導者の感想をまとめる。

- ・声を大きく、はっきりということを指導しなくても、自分たちの経験で考えて行うことができる。
- ・トピックと語のまとまりを考えながら文章構成ができるようになった。
- ・音読やビンゴゲームにより語順が定着しており、なんとか通じる英文を書くことができる。
- ・ひとりずつ原稿をチェックするときに、どこでつまづいているのかがわかり、個別に指導ができる、また自分の授業を見直すことができる。

4つ目の感想のように、スピーチは、指導者にとっても「指導と評価の一体化」を意識してできる取組であり、自分の授業を見直すきっかけとなることがわかる。

原稿をチェックしてもらうために待つ生徒の期待に満ちた表情を思い出す。生徒との1対1での関わりも大切なことであると感じている。

第4章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成をめざして

第1節 小学校英語活動と中学校英語学習をつなぐもの

(1)「小学校英語活動で身についたことを生かす」ことで見えてきたもの

生徒の小学校英語活動を通して、英語の音声におけるインプットに柔軟に対応できる姿、英語で話される言葉を理解しようと耳を傾ける姿、英語

を話してみたいと思う姿、様々な英単語やフレーズを知っているという姿や、英語を口にするこゝとや、発表をしたり、英語を使った活動にスムーズに取り組むことができたりする姿は、小学校英語活動の成果であると言える。この成果を踏まえて、中学校では、小学校英語活動での活動に段階を高めた目標を設定し、挑戦する楽しみを得られるようにしたり、音声からの学習をより一層大切にしたり、音とリズムで英語を唱えるチャンツなどの活動を取り入れるなど、中学校では小学校英語活動のよさを生かす視点が必要である。そしてそのことが、自己表現活動につながる。

小学校により、英語活動は様々であるが、英語が話されたときに、それを理解しよう、理解したいと思っていることは同じであると考えられる。そして、英語を話して相手に理解してもらえたという喜びも知っている。小学校英語活動を通して、聞いてわかる単語やフレーズがある。また、英語を口にするこゝとに躊躇がなく、言い間違ふこゝとも恐れずに発言する姿は、従来から考えると大きな変化である。

しかし、筆者を含め、中学校の英語教員には小学校英語活動が何を目的に、どのように行われているのか、また、子どもたちが具体的にどのような活動をしているのか、またどのような力がついているのかはあまり認識されていないのではないだろうか。それは、小学校英語活動の参観の時間が不十分であったり、小学校の教員との交流の場が不足していたりするからであると考えられる。筆者自身を振り返ると、小学校英語活動の参観は大きな驚きであった。「こんなこゝとを小学校英語活動で扱っている」「小学校の担任の先生がこんなに熱心に取り組んでおられる」と英語活動を再認識するきっかけとなった。小中連携を進めるためには、中学校英語教員は校区の小学校英語活動を参観する必要性を感じる。子どもたちが、どのように活動しているのか、どこまで学んでいるのか、子どもの中でどのようなものが育っているのかを見るこゝとが大切であると考えられる。

小学校英語活動が行われていなかったときには、中学校の英語学習はゼロから始めればよかった。しかし、市内全ての小学校の総合的な学習の時間で英語活動が取り込まれるようになった現在では、小学校英語活動を経験してきた子どもを中学校に迎えているのだから、その活動や、成果を認識し、そしてそれを生かすという視点を持ちながら

ら、中学校の授業を進めるこゝとが必要ではないかと考える。そのような視点を持ち、意識して生徒を見ないと、その成果が見えてこない。また、小学校英語活動で身につけたこゝとを生かすこゝとができず、身につけてきたコミュニケーションに対する意欲をそぐこゝともなるのではないだろうか。

また、小学校教員も中学校英語学習を参観の機会をもつ必要を感じる。小学校で行う英語活動が、中学校英語のどこにつながっているのか、何を学んでいるのかを見ておくこゝとは、英語活動のなかでの中学校英語学習へのつながりが見えてくるといふ点で意義があると思われる。

(2)「つまずきに対する支援を事前に準備する」こゝとで見えてきたもの

授業を、生徒が理解できるように工夫して進めるが、実際には生徒は授業の中でつまずく姿がある。それを前もって予測し、つまずきに対する手だてを用意しておくこゝとは、一人一人を大切にすることにつながることを考える。

小学校英語活動で楽しい経験をしてきた生徒たちにとって、中学校英語学習の「読む」「書く」は新しい経験である。この学習では「正確さ」が求められるため、間違いをすることにより、学習意欲を低下させないように支えたり、学習意欲を継続させたりするような支援も必要ではないだろうか。音声でのインプットには、十分対応できるが、文字への移行には十分時間をかけるこゝとが大切である。従来通り音声先行で新しい文型や表現を教えるが、そのあとに書く時間を授業の中で保障したり、音読など、文字を読む活動には、ペアワークを取り入れたり、立ったり、座ったりという動作を取り入れるなど、生徒が楽しみながら、クラスの友達と学び合える活動を工夫して取り入れるこゝとにより、学習意欲を支えたい。また、語順についての指導は、何度も言い慣れるなかでの定着を望むが、そのときに、ゲーム的な要素や、リズムでの音読を取り入れ、飽きずに何度も繰り返して英語を使っていく活動ができるような工夫を手立てとして用意したい。

(3)「自己表現活動を大切にすゝる」こゝとで見えてきたもの

英語を学ぶ上で、自分のこゝとが英語で表現できるようになるというのゝは、生徒にとっても嬉しいこゝとであり、また、英語科教員の目指しているこゝとでもある。中学1年生の自己表現を考えるとき、

まだ、英語を教科として学び始めて1年目の学習者としては、限られた語彙や、文型しか知らないの
で、自己紹介などの自己表現は、幼い英語表現で
あるのは仕方がないことと、筆者は思っていた。
しかし、これは、12歳、13歳の生徒の自己表現と
しては、十分なものではない。生徒の精神的な発
達段階を考えるともう少し、自分のことを詳しく
英語で表現できないかと考えた。第3章でも述べ
たように、日々の言語活動を土台として、スピー
チの話型を提示し、表現方法を工夫することで生
徒はやや構造的に、自分の表現したいことを筋道
立てて、ひとつのことを詳しく表現することがで
きるようになる。筆者が想定していた以上に生徒
が英語で自己表現ができたことは、新しい発見で
あった。年間4回のスピーチに取り組むが、スピー
チが最終的な目標ではない、スピーチを通して育
つ姿を期待する。生徒がスピーチで使った言葉は
生きた言葉として、また、自分を語る言葉として
今後も自由に使える言葉になると期待している。

実践的コミュニケーション能力について、直山
木綿子は、「定型会話を覚えて、海外旅行などをし
たときに簡単な英語で、自分が買いたい物を買う、
食べたいものが食べられるといった意味での『実
践的な』コミュニケーションではない。実践的コ
ミュニケーション能力はある程度の基礎を超えて
その先にあるもの」(21)と述べている。筆者は、
実践的コミュニケーションとは単に表面的に意思
の疎通ができるということにとどまるものではな
いと考え。伝えたいという気持ちを持ち、自分
にしか話せない内容を話すことができ、その相手
からでない聞くことのできない内容を聞かなか
で、心と心をつなぐことであり、それは、人と人
が互いにかけてえのない存在として関わる中で交
わされるものではないかと考えている。

中学生にとっては、その精神的発達段階から
「自分はどんな人間であるのか」と自己を見つめ
ることは必要なことである。そして英語学習を通
しても自己を見つめることは大切であると考え
る。英語で自分のことを深く語れたり、英語で筋
道立てた表現ができたり、英語でひとつのことを
深く話せたりすることができれば、母語である日
本語においても、筋道立てた話し方ができるの
ではないかと期待している。

小学校英語活動からつながる中学校英語学習
は、「聞く」「話す」の活動をたくさん取り入れな
がらも、「読む」「書く」活動も確実にしていく必
要がある。小学校英語活動では、大体の意味が聞

き取れたり、話せたりすればよかったが、中学校
では正確さが求められる、正確に読む、正確に書
くということを授業の中で、工夫して取り入れる
ことが課題として挙げられる。

(21)前掲 (14) p.67

おわりに

中学校で英語を教えていたとき、校区の小學校
で研究発表があり、それが小学校英語活動との初
めての出会いであった。小学校の先生がオールイ
ングリッシュで進められる姿。子どもたちに簡単
な英語で繰り返し語りかけ、子どもたちは理解し
ようとじっと担任の先生を見つめている。何て言
っているのかな、次の活動は何か、と期待をも
った目で見つめる姿。そして活動を楽しむ姿を見
て、「この子たちが中学校に入学してくるのだ。中
学校の英語の授業でがっかりさせてはいけない。」
と思った。

今年度参観した小学校英語活動でも、子ども
たちは、伝えたいという気持ちを大切に活動を行
っていた。子どもたちが使っていた英語は、単語
や、短いフレーズであったが、生きた英語を話
しているという印象を受けた。中学校でも生きた
英語を使い続けることができないだろうかと思
ったのが3つの視点である。生きた英語を使い
続けるためには、中学生の精神的発達段階に合
った内容を生徒が表現できるような工夫が必要
である。生徒は、今伝えたいこと、今話したい
ことを英語で話し、友達の話すことを聞き理解
できたときに、充実感や達成感を持ち、そのこ
とがさらなる学習意欲を生む。そして、「もっと、
英語で話したい」「今度は間違わずに話したい」
と願うということ、生徒の姿からあらためて
実感した。これが、「自ら学ぶ」ということ
であると思った。

今回の研究の中で、英語における言語能力を
育成することとは、母語における言語能力を育
成することになるのではないだろうかと思
った。これらの言語能力を高めることは、子
どもたちの豊かな人間性を育み、これからの
人生を豊かにすることにつながるのではない
かと考える。

最後に、研究の趣旨を理解して、意欲的に
授業に取り組んでくださった京都市立嵯峨中
学校の研究協力員の先生、惜しめない協力を
してくださった英語科の先生方や教職員
のみなさん、そして、楽しく、意欲的に学
んでくれた生徒たちに、この場を借りて
心よりの感謝の意を表したい。